

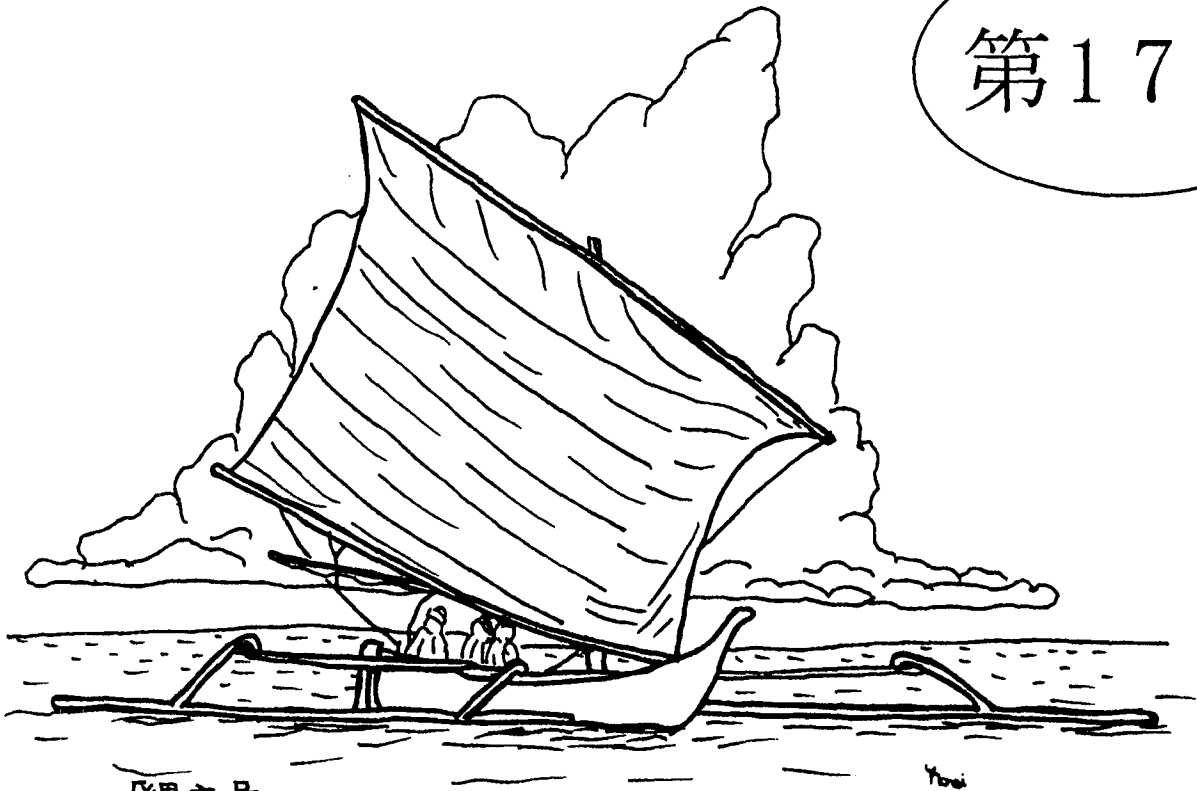
北スラウェシ日本人会
NORTH SULAWESI

日本人会会報

Tarsius

タルシウス

第17号



「繩文号」

「タルシウス」第17号目次

1. 自転車でミナハサを訪ねた馬鹿なヤツ	坂本 裕保	2
2. 南洋真珠事情	上月 洋明	7
3. 白蝶貝の海に潜る 「あるく みる きく」より抜粋		11
4. 慰霊祭のご案内	大之木秀雄	46
5. 入会挨拶	小寺 典	47
6. 今号の表紙	羽根井義博	49
7. 編集後記	長崎 節夫	50
8. 会員名簿		51

自転車でミナハサをたずねた馬鹿なヤツ

坂本 裕保

この稿は著者が2006年7月に日本から持参した自転車でミナハサ地方をジャランジャランした記録です。

2006年7月1日 朝7時。昨夜のワールドカップ、アルゼンチン・ドイツ戦で睡眠不足の起床となるも、インドネシアンコーヒーで目を覚ます。軽い朝食のあとさっそく自転車のりこみ、トモホンはコロンガンの友人宅を出発した。

トモホンから南へむかう道は思ったよりフラットで穴もなく、順調に行程をこなす。

トモホンからカワンコワンを経てランゴワンへむかう道は、過去に自動車は何回かとおっているが、いつも現地の友人がいっしょであった。今回は一人で、しかも自転車でジャランジャランとあって、私自身少々心細くもありメナドの友人たちも驚いていた。あえて行動予定も作らなかった。作らなかったというより「作れない」というべきか。トコブクで買った地図はあってもいいかげんな地図で、村々の名前はわからず距離もわからない。ホテルがあるのかないのかもわからない。以前に車で通った記憶をたよりにいきあたりばったりのサイクリングであるが、何とかなるだろう。

トモホンの市街地をぬけて南ミナハサ地方に入る。しばらく進むと、上り坂の途中に温泉がある。経済危機の際はあれはてっていたが今は整備されたのだろうか。入り口に食堂と料金所がある。一休みすることにしてコーラを所望したが冷たいのはなくてホットコーラであった。

まだ元気。恐れるものはない。

坂を下るとレイレム村にはいる。左手に見える小山の裏側にはリノウ湖がある。(本道からは見えない)。わき道へ入り急坂を上ると視野がひらけ、道路わきから硫黄が噴出している。おそろおそろそこを過ぎるとリノウ湖にでる。湖底から硫黄が噴出している。湖畔の駐車場が整備され、管理小屋らしきものがある。聞くところによると、湖の周囲を中国人が買い占めて将来はリゾート化する予定だという。ここにも開発の波がおしよせてきたようだ。

(* 2009年に休憩施設が完成。入場料飲み物つきで1名2万ルピア)

レイレムを過ぎてラヘンドンにはいる。そろそろ息があがってきた。ラヘンドンは「木工の村」である。通りにそって木製家具、ベンディ(馬車)の車輪など、製作・販売の木工所がならんでいる。木材はこの近辺で算出されるチーク材であろうか。私は若い頃クル

ーザーヨットを持っていた。残念ながらFRP製で、チーク材はほとんど使われていなかった。ここで材料を調達して手製のヨットができないものだろうか、と考えながら長い上り坂にさしかかる。曲がりくねってとにかく長い。自転車を手押しするしかない。

ソンドルに入る。ソンドルは先の大戦中日本陸軍部隊の駐屯地でもあった。そのせいか日本に対する心情はきわめてよいところである。盆地にひろがる町並みは整然としており歴史を感じる。

ソンドルバワ。ここには元州知事が個人の敷地内に作ったというプール、池、遊歩道のある小山があって釣り、ボートで遊べ、恋人達にデートの場所を提供している。(Toar Lumimuut Resort)

ソンドルアタス。戦時中はここに陸軍の本部があり、多くの日本陸軍将兵が駐屯していた。兵士はキアワにむかって左側の山の中に、竹組みにヤシの葉をかぶせただけの粗末な兵舎に駐留していたという。青木次郎さんが勤務していた缶詰工場もこの近くであり、将校のたまり場であこがれの君のいた喫茶店もここにあったという。

ソンドルをすぎると、まもなくして谷にはいり、左側の崖に旧日本軍が掘った防空壕のあとがある。谷からあがるには長い上り坂がまっている。やむなく徒歩であがりつめてキアワの町にはいった。現在、多くのキアワ人が日本で不法就労している。

「キアワ」とは、日本語の「協和」からとったという説があるが本当だろうか。町の入り口にはワールドカップですでに敗退している日本の国旗がはためいていた。教会があったのでそこで一休み。教会の祭壇のまえで女の子が5人音楽に合わせて踊っている。近々に結婚式でもあるのだろうか。

若干下り勾配のある町並みをあとに、カワンコアンへむかう。カワンコアンはカチャンタナー（ピーナツ）の産地である。町の入り口にはコンクリート製の巨大なピーナツが鎮座しており、道路沿いにピーナツのみやげ物店がならんでいる。豚肉、ゆでたまご、その他を包んだ中華饅頭もこの名物である。

カワンコアンを南に抜けるとまもなくキリスト教アドフェン派の学校区にさしかかる。アドフェン派はキリスト教でも戒律のきびしいことで有名である。酒、たばこ、コーヒー、肉類は一切ご法度。ベジタリアン集団である。

このキャンパスに居住している友人がいる。おそらく炎天下40度はあろうか。それまでがんばっていた気力がぬげ、彼の家の前でへたりこんだ。一服と思いタバコに火をつけたところ、近くにいた男が「オパ、ここは禁煙」。あわてて消した。しばらくすると外の異変に気がついたのか友人の奥さんが私のところへ来て顔をのぞきこむように、「サカモトさん、シラカンシラカン」、家の中に案内された、

ランゴワンの手前に小さな村があり、道端に巨木があって日陰をつくっている。日陰の部分は芝がはえており、半死状態の私は芝の上に寝転んだ。10歳くらいの男の子が私の自転車の車軸系と同じ大きさの自転車で近づいてきた。

「オパ、なにしているの」

「死んでいるよ。ライターがないな」

「かってきてあげるよ」

5,000ルピア渡すと近くのキオスで買って来た。電子式のライトが点く代物で今でも使用している。

「釣りはいらないよ」

「テリマカシ。オパ、自転車交換しない？」

「????」。困った。

まもなく母親らしい女性が買い物袋を持って現れた。お礼をいってそこで別れた。

ランゴワンの町並みの手前の交差点で左折し、左手にパサールを見てまた左折。トンダノ湖をめざす。午後1時30分。

ランゴワンからトンダノ湖畔のカカスまでゆるやかにくだり坂になる。65年前（昭和17年1月）、太平洋戦争の劈頭に、当時のオランダ軍のカラウィラン飛行場に日本海軍の落下傘部隊が急襲して激戦のすえ占領した。その激戦地のあとは田んぼがひろがって牛が1匹2匹のんびりあそんでいる。広いトンダノ湖の周辺は広大な水田地帯である。自動車でのドライブならのんびりと田園風景をたのしむところだが、自転車で半死状態の走行では風景どころではない。

カカスの水上機基地跡から湖岸にそってしばらく走ると、左手に墓地が見える。ここは数年まえに一度きた。戦前、ここに出稼ぎにきた坂口正成さんのお墓があるので参拝する。

そこから湖畔をはなれて内陸部を走る。まもなくレンボケン村へ入り右折。しかし疲れた。暑さ、坂道、高齢、悪条件が重なり最悪の事態になってきた。

夕暮れも近くなった。湖岸沿いにトンダノまで行くか、山越えでスマルエンドまで行くか、少し迷ったが思い切って山を越えることにする。山の向こう側に国立メナード大学がある。そこまでたどり着けば学生用のドミトリーがあるので今夜のねぐらは何とかなるかもしれない。しかしこれはまったく甘い考えであった。

山越えの坂道は両側から木に覆われて薄暗く、見通しもきかない。どこまで行けば峠に出るのか見当もつかない。疲れが極限にきたのか精神的にも参ってきた。耳のそばで悪魔がささやく。「行き来する車をとめて乗せてもらったら？」しかしたまに通るマイクロはいずれも満員。

とうとう精も根もつきはてて道端に自転車を倒して寝転がった。午後5時。あたりは完

全に暗くなり、小雨も降り出した。心細いことこのうえもない。「タクシーでも通ってこないかな」

15分くらいのびていただろうか。下から車のライトが近づいてきた。タクシーだ。道端に座ったまま手をあげると止まった。私は天にも登る気持ちであったが、タクシーの運転手は山中で行き倒れ状態の人間をみて驚いたかもしれない。ドアをあけて降りてきて「トアン、どこまで？」とっさに「トモホン」と叫ぶ。トモホンのどこか、コロガンだ。「OK、リマプルリブ（5万ルピア）でどうか」。

運転手は私の自転車を折りたたんで後部座席にもせてくれた。外は暗闇につつまれている。タクシーのシートにもたれかかった私は、死人が息をふきかえした気分であった。

かくして私のたった1日のジャランジャランミナハサは終わった。

(完)

この稿は、「よろずインドネシア」に掲載されたものを、筆者上月洋明さんの承諾を得て転載しました。「白蝶貝の海に潜る」と併せてお読みください。

南洋真珠事情

インドネシアでは、「木材屋、商社の行くところ、真珠屋あり。」と言われるほど、南洋真珠の養殖場開拓の歴史は古く、展開されている地域もほとんどインドネシア全国と言っていいほどです。戦前からスラウェシのブートンという地域で始まり、現在、もっとも南洋真珠の養殖場の多い地域はドボ、ロンボック、スラウェシという順です。インドネシアの水産総局に登録されている養殖会社の数だけでも約80社(日系、現地系)にもなります。

長くインドネシアに住んでおられる方でも、インドネシアで南洋真珠が生産されていることは知っていても、その真珠にお目にかかる機会は少ないと思います。それは、すべての真珠の加工、卸売のマーケットが神戸と香港にあり、インドネシアで販売されることなくほとんどが輸出され、神戸、香港に買い付けに来る世界中のバイヤーによって各国に再輸出されるためです。

バリの空港やジャカルタの町の真珠屋で見かける真珠は、インドネシア産とっておられるなら、ご注意の程を。私の見る限り、殆どの商品は中国産の安価な淡水真珠です。特に、たちが悪いのがバリの空港の土産物屋、からかいついでに、店員に「これはどこ産？」と尋ねると、「これは、ドボ産の南洋真珠。」と言ってのけるありさま、そこで悩んで、よく考えると、この商品がどこ産かなんてどうでもいい気のいいインドネシア人だと気づいたのでした。

1. 養殖場の風景



「フローレスにあるとっても美しい養殖場の風景です。」

南洋真珠の養殖は、水深20～70m位の波が静かで、潮が適度に入れ替り、白蝶貝の生息や、餌になるプランクトンの確認される湾や海峡で行われています。

もちろん、日本の真珠養殖でも経験したのですが、一つの養殖場に貝をたくさん置き過ぎたりすると自然のバランスを狂わせて、何年も掛けて育てた貝と真珠を自ら失うこととなります。

2.養殖の過程

養殖の過程をご紹介します。もし、あなたが今年から南洋真珠の養殖事業を始めようと思われるなら、真珠ができるまでにどれ位期間が掛かるのか、それぞれのプロセス毎に(括弧)の中に年月を示しておきます。いかに気の長い事業かご理解頂けると幸いです。

- a. 人工採苗・・・天然の白蝶貝を研究室のプールの中で掛け合わせて稚貝をつくります。(1997年8月)
- b. 稚貝育成・・・栄養、健康管理を行い、肉眼で確認できる大きさまで育てます。
- c. 稚貝沖出し・・・稚貝を研究室のプールから海に出します。沖出し後、貝が5cm位になるまで乳幼児と同じく死亡率が高く、時には全滅ということもあります。(1997年10月)
- d. 稚貝分散・・・稚貝の成長に従い収容しているネットの数を増やしていきます。
- e. 稚貝剥離・・・成長のいい貝だけを選別し、冒頭の写真のようにネットに整理して収容します。(1998年2月)
- f. 母貝育成・・・この頃から母貝と呼ばれるようになります。寄生虫や海草などが付着して成長を阻害しないように定期的に貝掃除を行います。一ヶ月に平均して1cm位成長して行きますので、貝の大きさに応じたネットに交換していきます。多少潮の流れがある場所の方がどんどん成長します。
- g. 抑制作業・・・貝も12cm以上に成長し、真珠を抱かせる手術に備えるため、静かな入り江に移したりネットにカバーを掛けて潮が直接当たらないようにして、貝の活動を抑え眠ったような状態にします。(1999年3月)
- h. 挿核手術・・・貝を海から引き上げ、真円な真珠を作るためのドブ貝と言われる貝の貝殻から成形した球形の核と、真珠層を核の周りに形成させるための細胞片と一緒に母貝に手術挿入し、海に戻します。(1999年4月)
- i. 転倒作業・・・真円でキズのない真珠を作るためには、核が貝の体内で適当な位置に留まることがポイントです。そのため、挿核手術後、転倒籠に入れて貝を何度か転倒して核の位置が定まるまで調整します。
- j. 玄貝沖出し・・・挿核手術を終えた貝を玄貝(くろがい)と呼びます。手術後の回復状況を見ながら、再度、沖出しします。
- k. 玄貝育成・・・貝掃除、ネット交換を定期的に行いません。
- l. 浜揚げ・・・真珠の採取のことを浜揚げと呼びます。9～15mmの南洋真珠が出来上がり

ます。しかし、養殖の期間中の海の状況、養殖の方法が悪ければ歩留まり50%以下ということもあります。(2000年10月)

浜揚げ後、真珠を取り出した貝に、再度、挿核をする場合があります、それを直入と呼びます。

3.南洋真珠の種類、品質

南洋真珠の種類には白蝶真珠、黒蝶真珠があり、白蝶真珠はインドネシア、オーストラリアで、黒蝶真珠はタヒチで養殖されています。

インドネシアで生産される白蝶真珠の品質(属性)を分類してみましょう。サイズ、形、色、テリ、巻き、キズという6つの属性の組み合わせにより品質が決定されます。価格は、品質により規定されますが、卸売り市場での相場で上下します。

サイズ

9mm、10mm、11mm、12mm、13mm、14mm、15mm、16mm、17mm、18mm

その他の属性が同じであればサイズが大きいほど生産するのが難しく価格も高くなります。

さらに小さなサイズでは、ケシという、核の代わりに異物の周りに真珠層が巻いてできた真珠もあります。

さらに大きなサイズでは、直入という方法で15mmを超える真珠を作ることも可能です。。

形

ラウンド:真円

オーバル:均整のとれた楕円形

ドロップ:月の涙といわれる形

ボタン:真円を少し押しつぶした形

サークル:周囲に直線的な筋の入った、コマのような形

バロック:動物など何かにとえることができるような個性的な形

色

シルバーピンク、ゴールド、シルバー、シルバークレー、クリームピンク、イエローがあり、好みの問題です。

テリ

真珠表面の境面性、真珠層の均一性に起因し、視覚的判断でテリ、中テリ、ボケと大まかに分類されます。

巻き

真珠層の厚さに起因し、深みや重量感といった視覚的判断で良し悪しが決定されます。

キズ

自然の産物ですので、人の顔の表面と同じように、多かれ少なかれ、必ず、どこかにキズがあります。その度合いで良し悪しが決定されます。

4.インドネシアの南洋真珠養殖の抱える問題

インドネシアでは、日系と現地系と比較して品質に著しく差があります。現地系の経営者は中華系が多く、目先の利益に走り、自然とのバランスを考えた生産量の調整、品質の追求の為の技術研究、従業員の教育といったことを怠っているためです。

海面養殖業の許認可制度が整っていません。地方政府が、もともと、漁業許可をベースに推薦状を乱発していた経緯があり、海面養殖業が適地を決定するまでにいかに多くの試験養殖場が必要かということ、また、都市汚染、近接する海面養殖場により大きな影響を受けるため、いかに広大な領域が必要かということが理解されていない結果です。

ご質問、ご意見等は以下のメールにお送り下さい。

e-mail: why.not.hiro@gmail.com

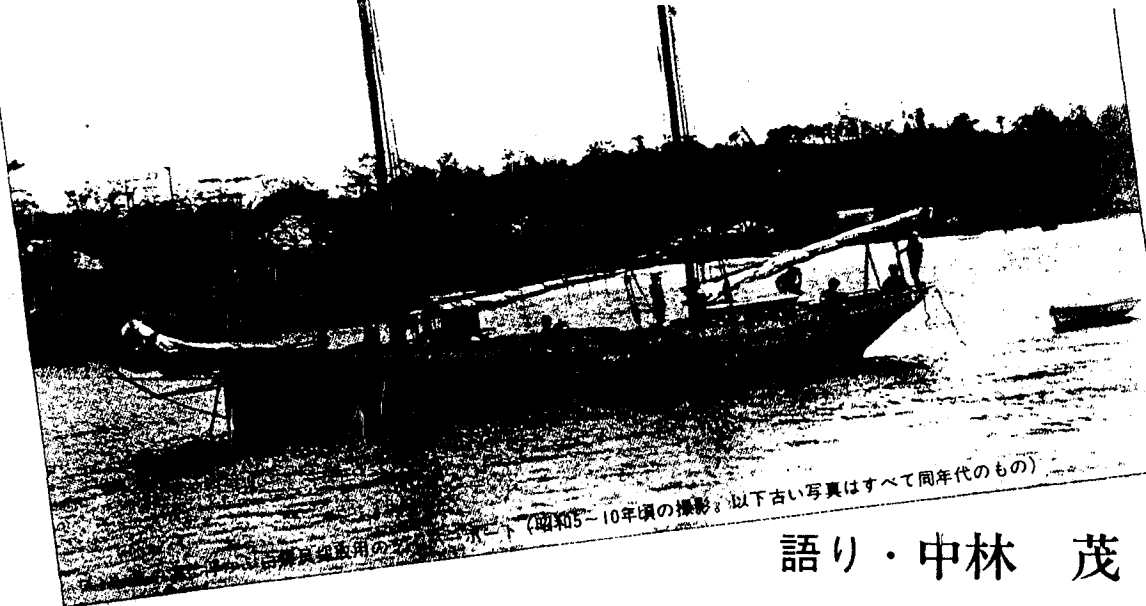
特集 ■ 白蝶貝の海に潜る——ブトン島真珠養殖記——



採貝船上ニ於ケル潜水夫ノ休憩

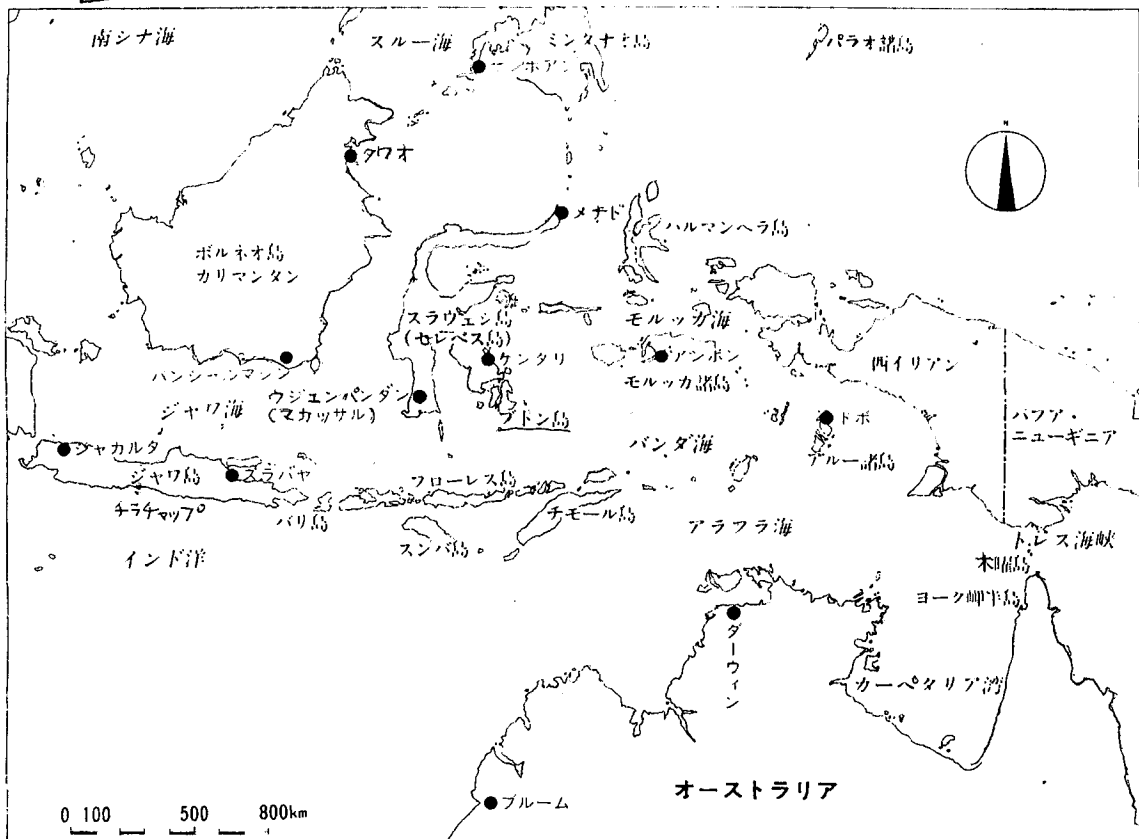
白蝶貝の海に潜る

—ブトン島真珠養殖記—



(昭和5-10年頃の撮影。以下古い写真はすべて同年代のもの)

語り・中林 茂



●ブトン島●ブトン島はインドネシア群島(現スラウェシ島)の南東部の沖合に浮かぶ、面積約4225平方キロ(沖縄本島の約二倍)ばかりの島である。第二次世界大戦前にはこの島で、世界に先がけて、日本人の手により、白蝶貝での真珠養殖が行なわれていた。

●プトン真珠養殖試験場●

で、プトン島で私が何をやってこられたか、どうしてインバーン……。
潜つて、真珠養殖用の白蝶貝、あねを採つてこた……。

プトン島は当時の蘭領東インド、今はインドネシアとい
つていますが、そのインドネシアのセレベス島（スラウェ
シ島）のすぐ南にある島なんです。若い頃、私はその島に
行ってましてね、行ったのは昭和五年だったかな……。そ
れから戦争が始まるまでずっと、そのプトン島にいた
んですよ。

で、プトン島で何をしていたか、といいますと、ダイバ
ーをやっていた。潜水夫ですね。白蝶貝パールシェルというのをご存知
でしょう、あれを採っていた……。当時のプトン島には、
「鳳敦真珠養殖試験場」というのが、これは三菱合資会社
の出資した会社だったのですが、ありまして、白蝶貝で真
珠の養殖をやっていた……。

真珠養殖というと、あなた方はすぐアコヤ貝を思い浮か
べるでしょうが、南洋では白蝶貝を真珠養殖の母貝として
使っていた。二十センチもある大きな貝でね……。そ
りゃあ、貝が大きいだけ、大きな真珠ができるんですよ。
実はアコヤ貝以外の貝で真珠養殖を始めたのは、うちの
会社が初めてなんです。うちの会社の岩崎小弥太が理学博
士の藤田輔世たすけさんの真珠養殖の研究を援助しましてね。藤
田さんは東京帝国大学の理学部を出た人ですが、西川藤吉
さんの弟子だった。西川藤吉は真珠の養殖方法を発明した
人です。確か、御木本幸吉の娘婿だったと思いますよ。そ
の西川さんの下にいたのが藤田さんで、藤田さんは日本で

養殖をやるのは面白くない……。南方で、白蝶貝でやれば
さぞ立派な真珠ができるだろう、というんで、白蝶貝での
真珠養殖の研究を始めたんですよ。

そこで藤田さんは、大正五年からインド、スリランカ、
アンダマン諸島、豪州の木曜島、ブルーム、インドネシア
のアルー諸島のドボと、三年ぐらいかかったのではないか
な。真珠養殖の適地を捜して歩き回ったそうです。今のよ
うに飛行機のない時代ですから、汽船を乗り継いでね。

貝があつても、養殖場に適しているかどうか問題です
からね。海底の地形がよくても海が濁るようじゃ、養殖に
は向きません。貝を管理するためには、貝が見えなければ
そしてプトンが理想的だということになった。大正九年
に養殖試験所を開いたんです。パウバウから九マイル離れ
たタンブーナというところですよ。ここに藤田さんの記念碑
があつたんです。戦争が始まると何か埋めてあるんじゃない
いかというんで壊され、今はもうないということですよ。

白蝶貝や真珠養殖と、今はアラフラ海が有名です
が、昔、アラフラ海で貝を採るのは、貝そのものを使うた
めに採つたんです。その副産物として高純な真珠が出たん
ですよ。オランダの方のアラフラ海で貝を採る根拠地がアル
ー諸島のドボなんです。ドボも貝を採って貝殻を利用する
。そして貝殻のなかに珠があつたら、それを頂だいでいた
豪州の方は、木曜島とブルームが根拠地ですよ。



白蝶貝（右）と
日本産アコヤ貝

※白蝶貝

アコヤ貝類中で最大の貝。殻の
長径が三十センチくらいになる。
ノイリピン以南のインド洋、太
平洋に分布するが、中でもオー
トラリアの北部海域のアラフラ海
に多い。南洋では真珠養殖の母貝
として使われている。また、殻が
固く、美しいので、工芸品やボタ
ンの原材料として使われ、戦前はア
ラフラ海に多数の日本人ダイバー
が採取に出掛けていた。

何んでこんなことを知つとるかというのと、当時、ブトンで貝を採る日本人ダイバーは、全部、本曜島やアルー諸島から流れてきたんです。初期にはダイバーがいませんから、アルーあたりから人を呼んで使ったわけです。それで私がブトンに行った頃は、ブトンのダイバーは、みんな本曜島やアルー諸島あたりのダイバーの経験者なんです。

当時の人で古い人に坂井百助^{もつと}っていう人がいます。紀州の潮岬の出身です。この人なんかは日清戦争に行っている。日露戦争にもやっぱ行ってている。そして本曜島に渡ったんでしよう。豪州の人が、東郷、東郷っていうんで、自分の子供に東郷って名前をつけたなんていってました。

私がブトンに行ったときには六十歳台じゃなかったでしょう。すでにオジイさんだったからね。坂井のオジイさんと呼んでいました。いたつて人がいいんです。言うことが正直で面白いんですよ。

坂井百助は、創設者に次ぐ会社の大恩人なんです。その功績にむくいてブトンにいるならご飯食べさせて、月給を出すというところで、会社の屋敷内の整理整頓、除草などをする連中の監督をしながら、昭和七年頃までいました。それから日本へ帰りました。

坂井のオジイさんは、母貝のあり場所を知っていたんです。オランダが白蝶貝のあるところを、このセレベスから東方を全部調査したときに、その調査団の一員だったから知ってるんですよ。ドボで白蝶貝を採っていたオランダの会社が調査をやったんです。

私らがオトさん、オトさんと呼んでいた前田晋次郎も紀州、吉原出身のダイバーです。オトさんは、アルー諸島の

ドボで潜っていて、その後、豪州へ密航したんですよ。アルー諸島は蘭領でしたから、豪州へ行くと思うと密航ということになる……。あの頃は密航する人間がたくさんいましたね。というのも、当時の豪州は白豪主義^{ビロウイズム}というか、極端に悪い言い方をすると、白人にあらずんば人にあらずというような主義でして、なかなか白人以外の入国、移住を認めなかったんです。ただ、例外はあった。ダイバーだけは日本人でも入国を認めてくれた。日本人ダイバーはその頃は優秀だと評判でしたし、アラフラ海での白蝶貝採りに日本人ダイバーは不可欠でしたからね。それでも、本曜島とかブルームとか、白蝶貝採集の基地を出てはいけなかったんです。

で、オトさんは豪州へ何で密航したのか、私は詳しいことは知らんですが、ともかく密航して、ダイバーをやらずにサトウキビ畑に潜り込んだ。サトウキビの農園で働いてたんです。警官以外の人間は、いくら豪州人でも別に密航者がいてもワアワア騒ぎませんからね……。ところがある時、町に出て、とうとう警官に捕まったんです。それでドボに強制的に送還されて、ドボから日本へ帰る途中のマカッサルで、うちの会社に雇われて、ブトン島に来たんです。

また、元ダイバーの尾田勝蔵というのいました。彼はパウバウでチーク材^{チーク}なぞ、インドネシアの物産を商っていました。雇住民にも中国人にも非常に人望のあった人で、りっぱな大きな家に住んでいました。この人は紀州、串本の出身でした。日本人の奥さんがいましたが、奥さんを帰した後、向こうで結婚して子供も何人かありました。

※アルー諸島とオランダの会社
アルー諸島はモルツカ海の東、アラフラ海の北部海域に位置している。約八〇の島々からなり、総面積約八千五百平方キロ。ドボはその中心の町で一九三〇年代の人口は約一千二百人。

電領時代にはこのドボにCTC（セレベス・トレーディング・カンパニー）という、白蝶貝採集会社があつた。CTCは本曜島の白蝶貝採集会社が共同で設立したもので、第一次世界大戦前には約五百名の日本人ダイバーが働いていたが、戦後は七十数名に減っていた。中林さんの会つた坂井晋助、前田晋次郎は、このCTCで働いていたと思われる。

※ブルーム
ブルームは、オーストラリア北西部、西オーストラリア州の北部に位置する港町。本曜島と同じように真珠貝採集の根拠地。トレス海夫の木曜島に次いで日本人ダイバーが多かつた。

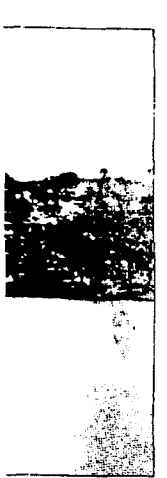
一九三〇年代のブルームの人口は、約一四〇〇名、うち日本人は二六〇名ほどだった。しかし、一九一〇年代には、一千名を超える日本人がいたといわれている。



三三三



量、四量、持ちは六量





養殖場には多い時で18人の日本人が暮らしていた。写真内の左は炊事場、奥は食堂。潮水の混った井戸水は生活用水に使用



倉庫や伝書鳩小屋（手前）。一時、養殖場とダイバーボート間の連絡に伝書鳩を使った



職員の宿舎（右）と天水タンク。飲料水用には四つの天水タンクの雨水に頼っていた



日本人職員用の宿舎。家族持ちは六畳、四畳半の部屋を割り当てられていた



ブトン真珠養殖試験場の全景。養殖場はブトン島の中心地バウバウの町の北約15キロの海岸線にあった

バウバウには無線や電話局があったので、尾田さんほうちの会社の囑託としてやつてもらっておりました。

昔のダイバーという人は、アルーでも木曜島でもほとんど潮岬一帯の人だったんです。

●魚野川で育った少年時代●

生まれは新潟県の山の中……。昔はダイバーといえば紀州の人でした。私のゆづな山で生まれたダイバーは珍らしい。

私は明治四十年、新潟県南魚沼郡堀之内という村の生まれです。私のような山の中の生まれの者がダイバーをやるのは珍らしいんですよ。

堀之内の、私の字下島は戸数百七戸でしたか。当時は九分九厘農家で、皆小作人だった。

私の家も、それこそ「上の一合」も持っていない。昔はそういう人が多かった。農家なんていつても、実際に田畑を持つている人が何人いましたか。ほとんどが小作人です。今、考えると、村全体がみじめなものでした。第一、服装がまるつきり違う。今の服装なら冷たいとか寒いなんていうことは、田舎へ行っても感じませんが……。昔はみじめだった。

私らの子供の頃から戦前まで、だいたい、次男は小学校を出たら、すぐ東京へ放り出される。昔は、高等小学校へ行く人間だつて何人もいないんだから。一家を挙げて出て行く人も多かったです。

東京に出て何をするかっていうと、手に職はないから、越後の人間は、ほとんど豆腐屋でしょう。そのかわり、真面目に骨を折るのを苦にしないから、金を残すんです。みんな、金を残して悠々たるもんです。だけど、世間的に知



ブトン島のバナナ畑。水田のないブトン島ではキャッサバやトウモロコシが主食（写真＝鶴見良行）

※木曜島と紀州人ダイバー

木曜島はニューギニア島とオーストラリア北岸のヨーク岬半島にはさまれたトレス海峡のなかの小島。長さは二、四キロ、幅は一、六キロしかない。

ここに一八六〇年代、真珠貝漁業が起り、日本人ダイバーが多数集まった。木曜島で最初の日本人ダイバーは、島根県人野波小次郎であった。一八七五年（明治七年）のことである。彼はトレス海峡一帯でもっとも秀れたダイバーとの評判をとった。後に続いた日本人ダイバーも真珠貝採取に秀れた成績を示したので、採貝業者が日本人ダイバーを雇うために日本に来るようになった。

一八九三年（明治二十八年）には、木曜島の日本人は三四人に減っていた。このうち紀州出身のダイバーがもっとも多く二五人を占めていた。

中村さんが、ブトン島に渡った一九三〇年代の木曜島では、日本人は六、七人を数えていた。しかし、日本人ダイバーたちの活躍は、反面、多くの犠牲者を出すことにもなった。

名度のある人は出ない。

それで、子供の頃は堀之内ですごしましたが、私は魚野川で育つたようなもんです。魚野川は水量が豊かなくて、福島県境や上越国境から大量の雪どけ水が流れてくるんです。私の村の近くで信濃川に合流するんですが、信濃川と魚野川ではまるつきり水の色が違う。信濃川はまっ黄色、魚野川はまっ青。それぐらいきれいな水だった。アユが有名で、魚沼のアユっていったら大隻有名でした。

だから、泳ぎの方はカッパです。子供の頃は三人助けましたかな。昔は、人命救助だなんていって表彰される時代じゃないんです。田舎だし、そんなこと公にすると、ぼろくそですよ。お前が危ない川遊びに連れて行くからだよ……、死んだらどうする、てね

その頃から私はガキ大将で、相手は自然。昔のことだから養蚕が盛んでしたが、そんな手伝いはやらんで、山や川ばかり飛んで歩いてたもんです。その時鍛えたのが今の健康につながっている。そんなわけで、私は学業は劣等だけ



ブトン島の中心地バウバウといっても、町を一步出ると、のどかな風景がひろがる(写真=鶴見良行)

ど品行方正だったんですよ。

五年ばかり前、田舎へ行つて、魚釣りに出たら、子供が五、六人ついて来た。危いと思ったから「俺より川下に行つたらいかんぞ、俺より川上で遊んでろよ」と。川下で遊んで流されたら、流れが急だから、こつちが追いつかぬや子供殺しちやう。私は非常に用心深いっていうか、用心深く育ちました。

自然とけんかして遊んでたもんですから、山でも川でも懐しいわけですよ。二、四日泊つてくるんですが、山へ行つたり、川へ行つたり、川は魚釣り、山へ行くと春先なんかショウジョウバカマとかカタクリとか野性の花が、ずーっと一面に咲いて、実にきれいなもんです。

大正十年三月、小学校を出ると同時に、その田舎を出ました。名古屋に、一家を挙げて行つたんです。田舎では貧乏でいけなかつたんですね。なぜ名古屋にかというかと、私らより先に身内の人が名古屋に出たから、それを頼つて行つたんです。

家は先祖代々、百姓の方はやらんけれども、土木というか建築の方です。父親は小規模に土木、建築の請負いをやつていた。田舎のことですから、道を造つたり、樋屋もやつたり、あれこれですよ。

その時代から、東京にも出稼ぎに行つたし、湯沢を越えて水戸へ出て、利根川の奥を越えて仕事をしに行つていた、という具合です。父親はだれかに使われたんじゃない、自分が親分でした。

私のおじいさんの親は、獣医らしいですよ。まあ獣医といつても、学校を出ているんじゃないから、ろくなもんじ

ブトン島に残る要塞跡よりのぞむバルタ海峡。海峡の向こうの島はムナ島(写真=福家洋介)



やないでしょうけど。馬喰ですわね。

私は名古屋では織物工場に半年ぐらい勤めました。今その工場はありません。当時は、野支峠とか紡績工場とかが華やかな時代で、そういう所へ、私も人の世話で行ったんで、けど、あまり面白くないものですから、やはり自分の身にひとつ職をつけた方がいいんじゃないかと、鉄工所に移りました。

●セレベス島マカツサルの町●

マカツサルの印象は、まあ、これが南洋だなと思っちゃった。
ヤシの木があつてね。きれいな町でね、日本人の小売店もありました……

私が三菱に入ったいきさつが面白いんです。

うちの親というのは、田舎を出てずつと越後弁で、とうとう東京弁を使わずに死にました。とくにおふくろなんてひどいもんで、相手がわかるうがわかるまいが考えたものではないんです。

この父親が、奥沢(世田谷)で石垣をちよつと横む仕事をしたんですが、この石垣の家に住んでいたのが、三菱の幹部なんです。それで知り合いになつたわけです。

三菱の幹部の人は、親がああいう親だから、さぞかし子供も親に似た正しい子供だろうと、考えたんでしよう。こないきさつで三菱に入りました。三菱には入る前から、ダイバーとして潜ることは決まつてました。

この潜るといふのは、なかなか難しいんです。水圧があるから、耳や鼻の悪い人は潜れません。昭和の初め頃は、その適格性を調べる方法がなかった。だから、会社が日本

鉄工所では旋盤をやってました。紡績の機械とか、もうそれはいろいろなものを作りました。ここには年季奉公で七年ぐらいいました。

父親は大正十一年、名古屋をはらつて東京に出ました。おふくろも翌年、東京へ行きました。ちょうど震災の年の秋です。私が東京に出たのは昭和四年です。そして十カ月ばかり、やはり鉄工所に勤めました。

から潜るために雇つた人は、私で二人目ぐらいでしたわね。

あとは、みんな現地雇いでした。

それで、どのようにして、適格かどうかを調べるかという、隅田川の永代橋と関係があるんです。この橋は日本で初めてできた潜函方式による橋で、橋桁の中に空気で圧力をかけて水の浸入を防ぎながら、だんだん下へ掘つてゆくんんです。この工事で、医学方面を担当したのが東大の貞鍋つていう医者なんです。

この医者と初めに話をした養殖試験場長の藤田さんが友達で、その関係で調べてもらったんです。果たしていい方法であつたかどうか、私は学者じゃないからよくわからないが、だけど、まあ、おかげでダイバーを六年やりましたから、適格だつたんでしよう。

当時は、町には失業者があふれていた時代でしたから、親父も喜びました。あの会社は給料がいいですからね。



ブトン島パウバウの港。遠浅の海は地曳網の良漁場でもある
(写真=福家洋介)

三菱には昭和五年八月に入社して、九月にはもうブトンへ出発しました。神戸から南洋郵船のチェリボン丸に乗船しました。

向こうの港（マカッサル）に入れば、日本旅館と日本語で書いた腕章をした人がいるから、これが俺の荷物だからってやれば、世話をしてくれるからと。その頃だから、荷物持って逃げる悪いヤツはいませんか。それは平和なものです。

当時、インドネシアへ行く船会社は、日本郵船、大阪商船、南洋郵船、石原海運の四社があった。もうひとつオラ



東インドネシア諸島の中心地、セレベス島マカッサルの港(写真=森本孝)

ランダの船会社で、ジャワ・チャイナ・ジャパンっていうのがあるんです。日本郵船は横浜から出て、パオオあたりを回ってインドネシアへ行く。南洋郵船はマカッサル直行です。昔は、直行するほど運ぶ物があったんですね。

神戸からマカッサルまで十四日かかりました。それが石原海運の新しい船だと十日かな。当時は風と潮の具合がよくなくちゃ走らんですよ。

船は、だいたい八千トンか七千トン。貨物船だから乗客は少ない。後甲板の下、舵の上が空いている場所で、このあたり一帯を部屋にしました。まあ、人を乗せてという時代じゃないから、りっぱな船を造ってもしようがない。

三菱からは私一人で行きました。一緒の客は二十人から三十人いましたかね。その人たちは、向こうでお店を開いていました。小売店が割合あったんです。マカッサルで降りたのは私ひとりです。あとはみんなバダヴィア（ジャカルタ）に行きました。

マカッサルというかセレベスには、日本人はあまり住んでいなかったんです。日本人の小売店が少しありましたが、何ととっても、日本人の小売店、雑貨商が多かったのはジャワです。

マカッサルの町で、日本人は二十人ぐらいじゃないでしょうか。沖繩の糸満の人が魚を獲ってましたが、あとはお店の人ですよ。小売店はこぎれいな店でした。まあ、小型百貨店、ありとあらゆる物を売ってました。

日本人の自転車屋もありました。これら紀州の人なんです。自転車はマークがギヤM、ミヤタです。ミヤタの自転車三台の値段がイギリスの自転車一台と同じなんです。

※マカッサル

マカッサルはオランダの植民地時代の市名、現在のウジユンパンダン市。植民地時代にあつては、モルッカ諸島を含む東部インドネシア地域を押える要衝の地だった。オランダの要塞、ロツテルダム城が港近くに建てられていた。モルッカ諸島の物資は、ほとんどこのマカッサルに集められ、海外に送られた。これは現在も変わっていない。

戦前のマカッサルの人口は、約八万五千人ほど。現在の人口は、百万人近くに膨れ上がっている。

※日本人の小売店

一九三〇年代のマカッサルには三十数軒の日本人経営の商店があった。この中には紀州出身者による自転車商九軒が含まれていた。

※沖繩の糸満漁師

素潜りでの採貝漁や追込漁を得意とした沖繩本島南部の糸満漁民。戦前には漁場を求めて広く海外にまで漁に出掛けたので知られる。インドネシアへは大正初期頃からバダヴィアで二、三組の追込漁の団体が漁を行なっていたが、マカッサルへは大正十三年、金城亀一らが採貝漁に出掛けたのが最初。



マカッサルの商店。商店のほとんどは華人の経営（写真＝森木孝）

当時それくらい日本の雜貨は安かった。安かろう、悪かろうの時代ですよ。

マカッサルの印象は、まあ、これが南洋だなあと感じました。ヤシの木があつてね。マカッサルの町全体はきれいです。それは、オランダ人が自分で住んでいる所だから、町のなかを歩くと、道路は広くて、電信柱は街路樹より低い。道路から屋敷へは、ちよつと距離があつて、やつぱり自分らの住みよいように作っている。オランダ人はマカッサルに相当しました。

私が泊まった日本旅館は、マカッサルの閑静な住宅地に

ありました。日本人夫婦がやってましたが、中国人の建物を借りていたようです。ブトン島への船待ちで、ここに十日ほど泊まりましたかな。同泊者は私のほかになかったように思います。一日の宿泊代は六円だか、八円五十銭だかで、そんなに安くはなかったですよ。

言葉もできないし、右も左もわかりません。だからマカッサルの日本人会の会長に連れられて、役所に行つて指紋を押したり、ひとりで旅館の近辺を散歩したりでした。

話は変わりますが、昔はカラユキさんが多かった。私たちは日本に帰つてからカラユキさんについて聞いたが、向こうじゃカラユキさんといわなかったですよ。娘子軍、その頃、そういつてました。

私がマカッサルに行つた頃は、その数は減つてました。つまり第一次大戦で日本が勝つて、戦勝国が人身売買なんてやつてるのはもつてのほかということ、オランダから禁止令が出たわけです。そこで、当時の人は結婚するか、そうでなければ日本に帰ると……

それで、そういう女が沢山いたのが、多くは結婚したわけです。七、八割は日本人と結婚したでしょう。残りは中国人とも結婚したし、原住民とも結婚したんじゃないでしょうか。だからマカッサルには、娘子軍で商売している人はいなかったと思います。

私が行つた時にはもう、そういうふうにならなくなっていました。日本人と結婚した人を、四、五人知っています。みんないい人ですよ。そりや、苦労していますから、出身は天草や島原でしょう。当時、天草や島原がいかにか貧しかったかということですよ。

※カラユキさんの減少

小林さんは、第一次大戦以後にカラユキさんの禁止令がオランダ側から出されたと言われているが、カラユキさんの減少はもう少し早い時期から始まっている。

日露戦争に勝つた日本は、「一等国民」の地位を獲得した。当然、それに応じた振るまいが、日本に要求される。一九〇六年、日本はオランダと領事館条約を締結してカラユキさんの廃止を打ち出した。しかし、条約を結ばず、すぐにカラユキさんの状況が変わるわけではなかった。それは、彼女たちの自覚と努力によるものだった。

※モルツカ諸島

モルツカ諸島は、スラウエシ島（セレベス島）とニューギニアの間のバンダ海に点在する島々をいふ。インドネシア語ではマルク諸島と呼ばれている。ハルマンヘラ島、セラム島、フル島などがある。

でも、ドボにはまだ沢山いたことですよ。モルツカ諸島ではドボだけじゃないでしょうけど、あとはたかが知れてます。

カラユキさんは天草、島原。男は紀州と決まっていた。紀州は潮岬付近。海岸まで山で、何もできない所です。潮岬なんて、今でこそ機械化された漁業が盛んですが、昔は

●養殖場の仲間たち①

養殖場に日本人は多い時で十八人いました。現地の娘と結婚してこの紀州の人もいた。ついでに原住民のメンバーもいましたね

養殖場のあるブトン島は、マカッサルからオランダの船で一昼夜。三週間に一度、便があります。ブトンには十月に着きました。

私が行った当時、ブトンの入口は、一九三〇年の国勢調査では十二万か十三万ぐらいですよ。日本の一県ぶんぐらいの大きな島なのに。対岸のムナ島はブトンよりも少し小さかったです。

ブトンの首都バウバウは、セレベス島南東部から島嶼部の中心地だったんです。これら地域一帯を治める一番偉いオランダ人がいたのがバウバウです。原住民はこのオランダ人をトゥアン・アイルと呼んでました。このほかに理事官もいました。その下にラハ（ムナ島）とケンタリ（セレベス島南東部）、コラカ（セレベス南東部のボネ湾側）に副理事官がいたわけです。だからバウバウには、セレベス島南東部では、電気も一番最初につきましたし、電話局、無線局もありました。

海外出なきやならん 私らが、次男は誰でも小学校を出たう、東京へ放り出されるのと同じ。

紀州の人は海岸でもまれているから、大阪へ出ても面白いもない。もつと志が大きいですよ。海外に出ようつていうんですから。私らの田舎なんかは、外国へ行くなどはない。つてのほかで、東京がせいぜい。

現在は、ケンタリがセレベス島南東部の首都になっています。というのはケンタリには飛行場があるからね。バウバウの市場のそばに南部という中国人店があります。

これはうちの会社の取引業者でした。小切手の換金なんかもここでやってました。中国人の商人がだいたいいましたよ。日用雑貨や他にも、トウモロコシを買ったり、カボック（綿）を買ったり、タピオカ、キヤサバ澱粉などいろいろです。前にも出てきましたが、うちの尾田勝蔵もバサール近くに倉庫を持ってました。彼はヤシ園もやってたですよ。

ブトン島には、三つぐらいしか会社らしい組織はないんだ。この半島（タンブリーナー）の一番深いところに、イギリス人の農園がありました。農園長は普段はスラバヤに住んでいて、年に一、二回、農園の見廻りにきていたようですね。名前を何とかホプキンスっていうんですよ。私も一度行ってみたけど、バインがあつたですよ。もうバインがいっぱいのはで、それはすばらしい匂いがしやが

モルツカ諸島は香料諸島とも呼ばれるほど、香料のチヨウジ（丁香）、ニクスク（肉豆蔻）の産地として有名。十七世紀、ポルトガルオランダ、イギリスはこの香料の独占をめぐる激しく対立した。しかし十七世紀後半にはオランダの支配権が確立した。



ブトン島バウバウの市場内のサトウキビ売り
(写真=福家洋介)

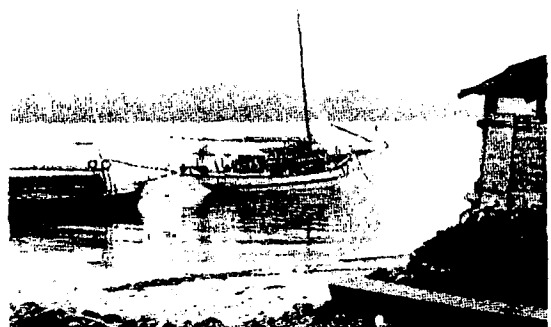
つてねえ。

その人が農民の見廻りに来て時々滞在しているのですが、農園の用人には、もし農園内を見廻って留守の間に、オランダ人の役人が来たら、事務所に待たしておけ。ミスター・スケオ（輔世）が来たら俺を迎えに来い」ってね、いつてたそうですね。それほど藤田さんは紳士だったんですね。藤田さんは責任者として、奥村雅雄さんと一年交代でブトンにいました。偉い人は一年ブトンにいて、帰るんです。

うちの養殖場はタンブーナにありました。会社は農場もやるために、非常に広い面積を借りていたんです。ところが、農場には適さない石灰岩のところばかりで、借りっぱなしで税金を納めていました。

養殖場に日本人が一番多いときで十八人いました。奥さんと子供を入れてです。紀州の人で現地の女性と結婚して、子供が三人もいる人がいたのですが、この人は病気で、私の行った翌年に亡くなりました。残された子供のうち、男の子は紀州からその人の兄が来て日本に連れて帰りましたが、女の子は奥さんに残りましたがね……。

私は島野竹松さんの代わりにダイバーとして来たんですが、この島野さんは会社の連絡船の船長になりました。ちょうど、連絡船の船長が亡くなりまして、その後釜に座ったわけですね。そして私が島野さんの乗っていたダイバーボートに乗って潜ることになったんです。島野さんは三浦半島の人です。連絡船は養殖場とパウパウ間、養殖場とダイバーボート間の連絡をします。食料運んだり、採った母貝を養殖場に運んだり。こういった船が二隻ありました。



ブトン島パウパウに交易に来たブギス人の帆船。インドネシアではまだ帆船が多く使われている（写真＝福家洋介）



ブトン真珠養殖場に遊びに来たオランダ婦人

原住民のダイバーも一人いましたね。マヤっていう男なんです。ブトン人です。マヤさんも日本人に潜水を教わったんです。それは日本人ダイバーが足りないときばかりでなく、経費の問題もありますからね。日本人雇うと、こういっちゃ何ですが、大会社がそういうことすると、大変な経費がかかるんです。

例えば、汽船に乗るでしょう。毎日、手当が十円です。宿に泊まれば手当がつく。経費は会社持ちだし、原住民の方がそりゃいい。原住民のダイバーを雇った場合、ボーナスとか固定給が日本人より少なくてすむ。固定給は私が三十四ぐらいいだから、その半分ぐらいいだったかな。だが、日常生活での待遇は、日本人ダイバーも原住民ダイバーも同じです。白蝶貝を採ったら、一個、三十銭の報償金も同じでした。

※真珠養殖場で働いていた日本人ブトン島の養殖場で働いていた人々は以下のとおり。初代試験場長は藤田輔世であつた。

藤田輔世・小川平三・村松蔵・高田虎次・菅原照清・伊藤恒一・林慧・石川伍平・岩城博・大串梅次・和田連二・池静・鈴木直次・和田弘・住谷太市・島野竹松・中林茂・浜口力夫・飯田文治・広浜多賀生・中野倉一・熊谷保・藤木豊・坂井百助・前田音次郎以上（*印はオーストラリアに抑留された人びと）

マヤはおとなしい男ですが、ダイバーの経験は豊富です。イスラム教徒ですが、酒は飲んでました。会社の使用人部落に所帯を持ってました。現住民はイスラム教徒ですが、それで酒を飲まないかという、飲むんです。断食しやしません。豚を食わないだけで。ブトンあたりでも本盛

●養殖場の仲間たち②●

養殖場で働くんは原住民にやると働けども何ぼもなるとはわ。山に行けば食物は何でもなるとも無理。と働かなんやなるとはわ。

その当時、ブトンの養殖場には日本人ではね、浜口夫妻さん夫婦とか篠木豊さん、菅原重吉さん、大串梅次さん、伊藤恒一さん、林慧さん、岩城博さん、そうそう、私より五つ年下だったんですが、石川伍平もいましたね。彼は作家の石川達三の弟ですよ。今でも私はたまには会いますがね。彼はブトンで養殖の方法を覚えてホルネオのタワオに行つたんだ。タワオのスイシイ養殖場にね。

あのね、岩城博さん、彼は戦後オーストラリアで白蝶貝での真珠養殖に成功したんですよ。成功したとたんにくっついてしまいました。最初は、やはり、うちの仲間だったんですよ。最初にいったように、白蝶貝で真珠の養殖をやつたのは、そもそもここが世界で初めて。今、フィリピンのミンダナオ島のサンボアンガにしる、オーストラリアにしる、どこの養殖場を始めた人もみんなうちの養殖場の末孫といつていいですから。

菅原さんは宇和島の出身だったかな。彼は白蝶貝のオペレーター、核入れの技術者、浜口さんや篠木さんは、その

に信心している人は断食しますよ。だけど、ほとんどのブトン人やムナ人は、やりません。朝、晩のアツラー・アクバル（祈りの初めに唱える言葉）もやりませんし、小さい、三つ、四つの子供がヤシ酒飲んでるんですから。

先手の仕事をしていましたね。核入れた白蝶貝を受け取り、籠に入れて海に入れる仕事です。浜口さんは水中、篠木君は水上で二人でコンビで仕事しましたね。オペレーターから、どの貝をどうするという指示があるから、それに従つてね。だから浜口さんは養殖場のダイバーだけど、母貝を沖に出て採るのでないから危険はない。浜口さんの奥さんはお勝手で炊事……。夫婦でそういう契約で雇われてた。

大串さんは三菱重工から引っぱられてきました。建物とか機械とかの担当。管轄係というんですか。工作の旋盤とか、ディーゼルエンジンで発電してましたからね。発電能力七KWのヤンマーディーゼルで、夕方の六時十五分から九時まで発電機を回して電燈をつけてました。目的は電燈をつけるばかりじゃあなくて、真珠や核をみかくために特殊な機械を回しますからね。回しかたが九時まで電氣をつけるわけです。

そして、九時すぎると、自動車の大きな蓄電池が五つほど

*アツラー・アクバル
アツラーは偉大なりの意味
イスラム寺院から毎日流されるコーランの一節は、すべてこのアツラー・アクバルで始まる
コーランは、イスラム教徒に一日五回のお祈りを義務づけている
インドネシアは人口の約五割がイスラム教徒である

かりあるんで、それに切り換えて、乳飲み子のいる人の家にだけ電気をつけるわけです。あとはみなランプです。

伊藤さんや林さんは職員というか事務。事務の書類は全部英語なんで、彼らは今の一橋大を出ています。外国で企業やってますよね、外国の役人が見てもわかるように、英語で帳簿、日誌をつけておくんですよ。今日は、貝を何個手術した、何個採って何個放したけど何個死んだ、と明細がわかるように。検査されてもいいようにね。

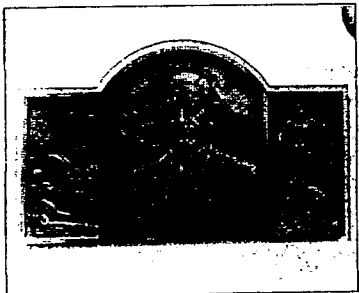
検査はやっばりくるでしょうね。私も後には十ヶ月間ほど帳簿をつける仕事に回って英語を書いてましたがね。書くことは書くけど、内容は何もわからないのや。何十種類かの英語を丸暗記しとけばすむんだから。セレクト・カルチャア・オイスターなんてね。白蝶貝、あれでもオイスターですわな。パール・オイスター……。

浜口さんの技術者は当時給料は百円以上になったでしょう。その当時の日本の三菱の課長の給料が百二十円くらいでないでしょうか。でも養殖場の事務の人は二百円以上もらっていたでしょうね。

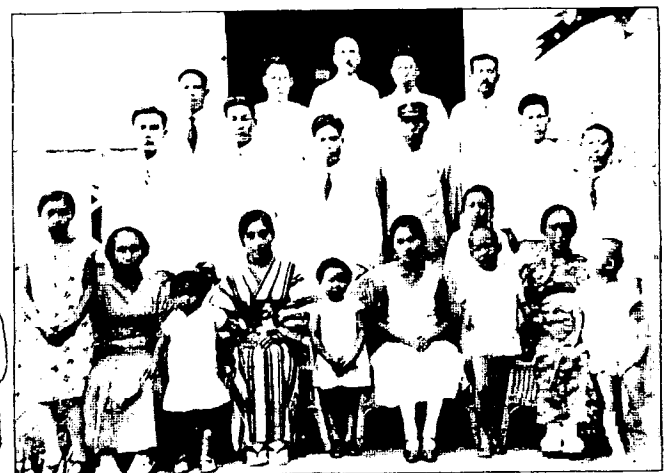
会社が使っている原住民は、全部で五十人ぐらいです。彼らはみんな固まって、そうですね、十五から二十戸ぐらいありましたかな。村がなかったところに、現地の人も移り住んできたのです。原住民が住んで、会社の借りている中に畑を作ろうと、決しどうこう言われません。使っていれば、その人の権利なんです。でも私有権はないんです。会社で使っている連中は、三分の二ぐらいは会社の支給品で生活していたんでしょう。もちろんダイバーボートの乗組員は船で食べるし、召使い連中は食事付きです。



白蝶貝による養殖真珠を開発した
藤田輔世の記念碑とその除幕式



ブトン人ダイバーのマヤさん(右端)



ブトン真珠養殖場に働く日本人。ダイバーは紀州出身の人が多かった

ただ、真珠貝養殖用の籠を作っている人とか、屋敷内の草をとっている人とか、そういう人は食事付きではありませんが、ですから原住民はろくなもの喰ってないし、ろくな



労働していないから体格が悪いんですよね。食事付きの所にきますと、適当に働いて、適当に食べるものですから、みるみるうちに体格、体調が良くなります。胃拡張で出づばつてる腹は、キユツと引つ込むし、マラリヤで腹が大きいのも、薬を与えますとすぐに治って、みるみるうちに体格が良くなります。

ところが、原住民にとつて会社で働くことは、憧れでもないんですよ。それが、やはり強制で毎日仕事するってことは、ジャワあたりに行けば食うに困るからどうか知りませんが、フトンあたりじゃ、生きてれば仕事なんかしなくていいんです。

山に行けば何でもありますわ、芋とか果物とか……。そういうのを採って喰えばね、でもそういうのにや栄養は少ないから、今話したように会社にくれば良くなるってことで。

●潜水訓練と潜水服

潜水の訓練はそれほどかかりません。でも、潜れるからといってパツと潜って白蝶貝を採れる、とごうわけにはいかならんです。

フトン島には十月に着いたのかな。さつそく、その年の暮れから潜水訓練です。先生は先輩の日本人ダイバーの島野竹松さんです。島野竹松さんは神奈川県の大浦半島出身で、私より四つ年上です。前にもお話ししたように、私がダイバーとして入ったので、彼はダイバーを止めて、養殖場の連絡船の船長になったんです。彼とは日本に帰ってからも、ずーつと交流がありました。もうじくなりましかけど、お葬式には行きました。

生きているだけならフトンは呑気ですな。

私は、ああいう生活に憧れていますよ。今の時代はどうか知りませんが、何も考える必要はないんだ。親がどうの、子はどうの……。当時はね、生きていくだけなら、こんないい所はないですよ。

原住民は、会社に勤めてよかったとは、たいして思わんでしよう。出入りが激しかったから。嫌で止めたりしてましたから。二、三年は勤めるんじゃないですか。でも、私のある間、ずーと勤めていた原住民も少しはいましたよ。原住民の給料は月給です。ダイバーボートに乗ってる連中は四ギルダーから六ギルダーぐらいですか。テンダー、命綱持つてる男は、二、三ギルダー。だけど金の価値を知らんから、パツパツと博打なんに使うてしまつてねえ。

潜水自体の訓練はそれほどかかりません。そんなもの二、三ヶ月もあれば……。訓練で難しいのは、空気の調整ですよ。潜水の深度に併せて、上から送られてくる空気の量を調整する、どれくらいの空気を保つていたら、一番理想的な動きができるか……。

船上からはフライホイールを回して空気を送ってきます。これは手動でした。オランダは船にしる、潜水ポンプにしる機械化を許さないのです。それで大きなフライホイール



養殖場敷地内に建くられたフトン人使用人の集落。約50人のフトン人が働いていた

が二つあって、それでシリンドー内のピストンを動かして空気を送るんです。いたって簡単なポンプだが、実際にうまくできている。シリンドー中に入った空気は絶対に外に出ない、帰ってこないようになっている。

ただ、潜っている者には、送られてくる空気の量の調整が難しい。ご存知のように、何十メートルもの底の魚を釣り上げると、腹わたが飛び出す。ああいう状態になると困る。

深く潜りますと、水圧がかかりますから、空気を余り逃がさないようにしておく。頭に被っているカツレットというのですが、その横に付いている弁をしめて、空気のポコポコをできるだけ逃がさない。そのままの状態を上へ行きますと、水圧が減って空気がふくれますから、浮力がついて、すごい勢いで浮き上がりますね、ウワーツと。魚と同じようになる。それで空気の量を調整するんです。上に上がるに従って、弁を開いて空気を外に出すんですね。また、船の上からダイバーを引っ張り上げる人が楽なように、適当な力で引っ張り上げられるようにしては……。だから空気の調整は難しいといえは難しい。

訓練しても、やっぱり一人前になつて、ハツと底に潜つて具を見つけるとなると、何年もかかります。潜れるからといって、一ヶ月で一人前というわけにはいかない。船がのるには三年ぐらいかかりますね。

私が行った当時の潜水の器具、潜水服、ポンプなどはイギリス製ですよ。それから空気を送るホースね、みんなイギリス製です。日本製の「ドレス」を着て潜った記憶はありません。昭和十何年頃から日本製のドレスもできるようになりましたが、これは横浜に工場があります。

「ドレス」というのは潜水服です。頭にかぶるのは、「カツレット」というんです。ペラペラの薄いものですが、丸いですから、つぶれない。

それから靴。靴は自分で作るんです。台が木ですから釘を打つてねえ、鉛を底に打ちつけるのも、みんな自分で作ります。そんな難しいものではないですよ。靴だなんていって、難しく考えるときかない。はければいいんです。皮はすごく厚い牛の皮でしたよ。きちんと型をとっておきましてね。だいたい靴の重さは片方一貫目(三、七キロ)です。深いところには鉛をはいるのは一貫五百ぐらになるかなあ。

胸と背中には鉛をします。それぞれ四貫目ずつ、両方で八貫目(三十二キロ)です。大きければいいって、十六貫目の人なら十六貫目の装備ということですよ。

「ドレス」の下に着るものが大変なんです。それはすばらしいもの着てますよ。ラシャのシャツと股引き、その下にラシャのふんどし、ラシャの腰巻き。これだけは会社からくれません。これは自分で用意します。

その上に太い毛糸の靴までの靴下をはくのです。その上に太い毛糸の丸くびのシャツ、その上にひざ下までのラシャの半丈ポンをはくんです。そうして、もう一枚、毛糸の長いくつ下をはくんです。冷えますからね。くつ下は一枚はくんです。

それからカツレットとドレスを結びつける金具の下の肩当て、これはラシャの靴下などの古布など縫って作るんです。これがドレスの下につける一式です。

どうしてラシャかというと、わりあい擦れませんか。夏服のペラペラのラシャではなくて、少し厚手のものです。

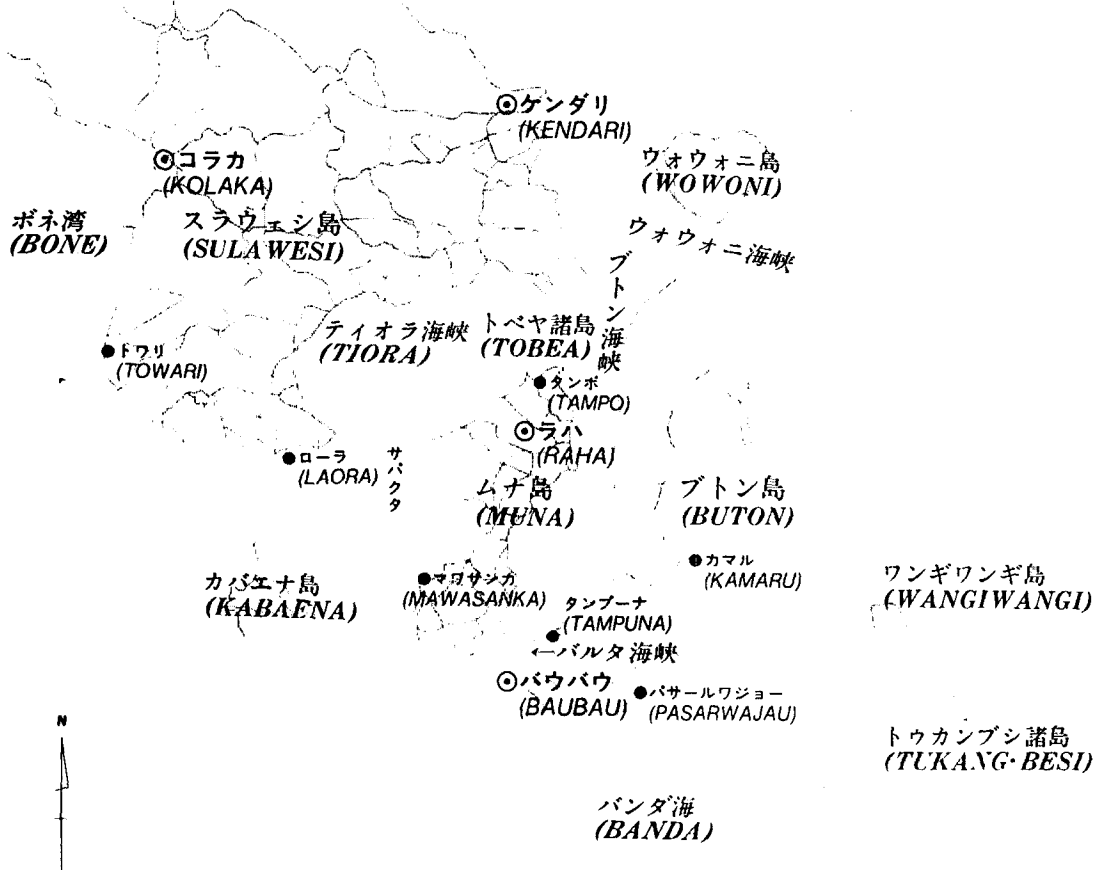
●養殖真珠の開発●

日本の養殖真珠の歴史は、明治二十六年に御木本幸吉がアコヤ貝を甲いて、平高真珠(一枚付き半両真珠)の養殖に成功したのに始まる。つづいて、明治三十二年に御木本養殖真珠の技術、養殖乙吉らにより、世界に先がけて、安全なる真珠の養殖に成功した。幸吉の開発した真珠養殖方法は、核を、他のアコヤ貝の殻の一面から取り取った外殻で包みこみ、貝の胎内に挿入して真珠層を形成させる、いわゆる全冠式と呼ばれる方法であった。

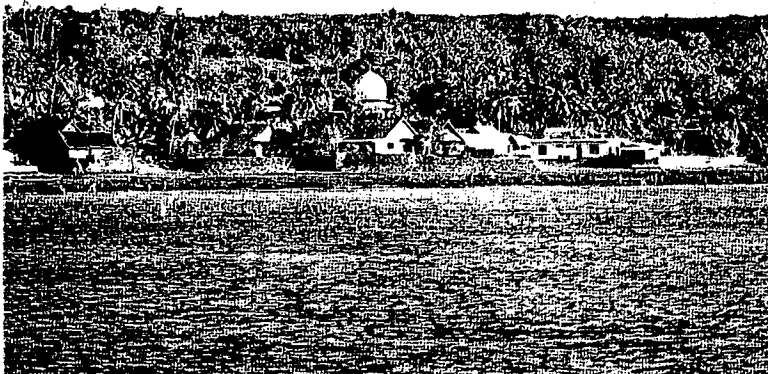
これに対し、中林さんの談話に登場する西川養殖は、御木本幸吉の次女の望嶺で、明治三十二年から御木本の養殖場に移って、明治四十年にそこを辞し、淡路島神奈川典の三浦に独自に研究所を開き、外殻の薄片を核に包みこみ、貝の胎内に挿入する「ピース式」と呼ばれる真珠養殖法を開発している。これはその後、今日まで核技術の基本となっている。藤田輔世はその弟子で、西川と共に養殖技術の開発に当たったが、西川の亡き後、藤田による真珠養殖を世襲して初めて試み成功した。

AGD
BEST

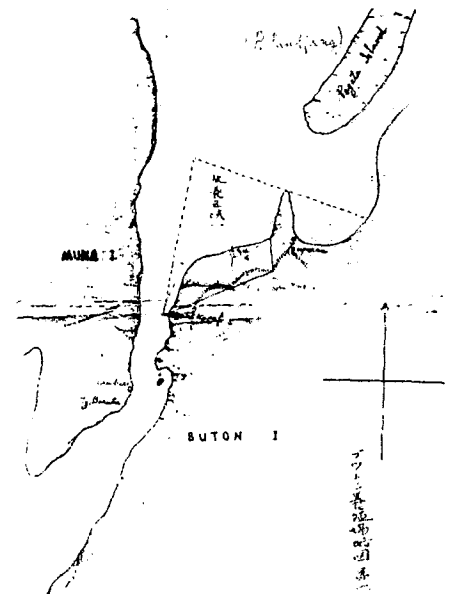
ブトン島及びセレベス南東半島部地図



地図=正洋美



ブトン島バウバウの町。町の背後は平坦な石灰岩台地が続く（写真=鶴見良行）



養殖場はブトン島とムナ島間のブトン海峡の中でも一番狭いバルタ海峡に面したところにあった

それでもやはり冷えますからね、膝なんかねえ。

なぜ、ふんどしをするかっという、水圧があるでしょう。水圧でもって、ドレスが皺になるんですよ。そうすると皺でもって咬まれるんです。だから、おチンチンぶらさ

●白蝶貝の海に潜る●

四、五十メートルに潜るといふは深くて怖い。十分間を底に居る。目の先が黄く濁る。おんなは仕事やむかひたじやなご……

そうして訓練を終えますと、いよいよダイバーボートに乗って、潜って白蝶貝を採るわけです。ダイバーボートはオランダが動力船を禁止していましたから、二本マストで長さが六十フィート（約十八メートル）ぐらいの帆船でした。船名はオリエント号です。動力を禁止したというのは、白蝶貝の乱獲をさける、資源保護のためでしょうね。

ダイバーボートの乗組員は担当がみんな決まっています。命綱を持っている人、テンダーというのですか、その命綱で連絡を、海底から台図するわけです。もつと空気を送れ、もつと綱を延ばせ、上がる、みんな命綱で台図を送ります。そんな関係ですからテンダーがダイバーを殺そうと思えばわけはない。空気を送らなきゃあ死んじゃう。ダイバーはドレス着ている間は絶対に抵抗できません。だからダイバーにとつてはテンダーは神様の次です。

この他にポンプ係りが二人、パイプ係りが一人、船の碇綱を扱う役が一人。日本語でいうと給士、ボーイですか、プ

げておくと咬まれちゃう。眼のところなんて、咬まれて真黒になつてる。十メートルで一気圧、三十メートルだったところら三気圧だ。身体の面積はどのくらいありますか。そこらところらにみんな圧力がかかるんですよ。大変な圧力です。

から、全部で八人がダイバーボートに乗っている。

一隻に八人、まあ、そういうメンバで仕事をするのですが、根拠地のタンブーナを一端でたら、四、五月頃からその年の暮れまで、八月のオランダ女王の戴冠式だったか誕生日だったかの時には、ちよつと帰ってきますが、ずっと船の上で生活している。

だから船の上では全く日本語をえません。変つた人の顔を見ることもなし、全く人の交流がないのですから……それは島に寄りますから、人の顔は見ますよ。しかし、寄る所は決まっていますから、その人間の顔は見るけど、他所者の顔は見ない。だから何年たつても同じ顔を見ている。一年のうち正月、一月は会社の養殖場のある付近で、そこを根拠地にして、プトン島とムナ島の間の海峡で、プトン海峡というのですが、その中でも一番狭いバルタ海峡、幅が四百メートルぐらいだったかな、そこで潜って白蝶貝を採るんですね。狭いものだから、干満の差の激しい大潮の時なんか、プワッーと潮が行く、そりゃあ、潮の早いとこでしたね。

※オランダ女王の誕生日

毎年、八月三十一日はウィルヘルミナ女王の誕生日にあたり、オランダの植民地であった当時のインドネシアは全国いつせいに休日になった。中林さの日記でもこの日は「和蘭の天長節につき休み」となっている。

南海の海底はどう説明したらいいか、よくテレビで南海の海底がでるでしょう。とてもあんなものじゃあないですよ。それはきれいなものですよ。

ところが、そういうきれいな海には白蝶貝はいないんです。珊瑚礁のある所には……。珊瑚礁は生き物でしょう、プランクトンを喰ってしまふんです。だから、貝の方へはプランクトンの配給がいかない。だから珊瑚礁の発達した所には白蝶貝はいない。いても成長が悪い。栄養失調で早く歳をとってしまう……。それとは別に、いろんな貝のいる所があるんです。そういう所に白蝶貝はある。

白蝶貝は小さいうちは移動するようです。適当な、自分が居ごちのいいのか悪いのか知りませんが、根を張る所が弱いと他所へ動いて行きます。そしてギューと岩か何かの貝殻にくつつくんです。くつつくとなかなかとれませんがね。強い紐でね……。潮に流されて環境の悪い所に行っちゃあ困るから、くつつくんですから。そして大きくなると潮に流されないようになるから、海底に自然に転がっているんです。口を上に向けて開けていますがね……。

でまあ、バシタ海峡で一月から二月、一杯まで白蝶貝を採っている。その間に二杯あつた白蝶貝採集船を一杯ずつ交代でドックにあげるんですね……。船の修理に。

と申しますのは、深水、つまり深い海では八日間働いて七日間休む。何故かっつのは、後で申し上げますが、その休んでいる間に船をドックにあげるんです。というの、熱帯地方は船喰い虫が多いですから、船底には、吃水線から下ですが、全部銅板を張っている。船舶用のタールを塗って、毛紙（毛紙）というんですか、紙を貼って、その上に銅板

を張っている。その剥げた箇所を修理したり、その他、デッキなどは檣皮（檣皮）を打って、きちんとしてね。また遠い所に出ても船を舂れまで修理しなくいいように準備しておくんですよ。

そして四月に入ると、乾期の初め頃ですが、今度はムナ島の裏側の海に出て行くんです。ムナ島の裏側を廻ってセレベス島の南端のローラという所、そこに一潮か二潮（十五日〜三十日間）くらいいますか。

それから次はゴイラの東のマンチャロツカに移動します。七月頃には今度はサバクタに移ります。一番長くいて潜るのが、このサバクタです。これは丁度、ムナ島の西岸の沖で、ムナ島からは五〜六マイル（約八〜九、六キロ）くらいの距離ではないですか。

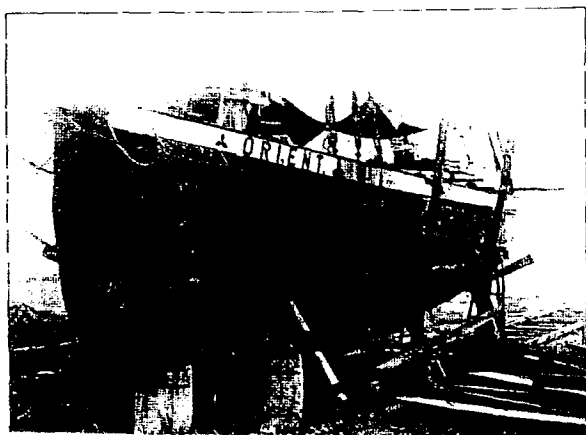
サバクタというのは、サツバは島の人の言葉で砂の島ということにして、周囲を珊瑚礁が取り巻いていて、その真中にタツと長い砂だけの島があります。そして満潮になると、そのほんの一部だけが頭を出すだけで、潮が引くと、タツと珊瑚礁から広い面積が干上がって、その真中に砂の島が続いているという、そんな所でした。

そのサバクタの沖合に出て白蝶貝を採るんですよ。このサバクタの海は十二、三メートルの深さでしたかね。バシタ海峡は深いですよ。いくら浅くても二十メートル以上。四十メートルくらいになります。いわゆる潜水病のおこるところですよ……。

それは浅い海、私らの言葉でいうと浅水、深いところは深水（深水）というのですが、浅水の方が潜りよいですよ。というのは、海には大潮と小潮があるでしょう。大潮の潮流のプワ

※檣皮

檣の内皮を砕いてもみほぐした柔らかい繊維。木造船の板と板との合せ目に詰めこみ、浸洩れを防ぐ材料として使われた。この他、墳の木の内皮も使われている。専門の舟大工は檣皮も槓皮も、おしなべて槓皮と呼ぶ例が多い。国内では和歌山県が槓皮の産地として知られていた。



小林さんの乗っていたダイバーボート、オリエント

ツと行く時には潜れませんか。それで毎日、潜っているわけではないんですよ。深水では一潮（十五日間）の間で七日間潜って八日間休む。ところが浅水では十一日間潜って、四日間ぐらい休む。大潮の本当に潮の早い前後に休むぐらいですね。いくら海が浅くても大潮の時には潮が早いですから……。潮が止まったな、と思っていると、すぐまたツと潮が動きはじめますからね。それでも浅水になると潮の流れもゆるやかですから、朝から晩まで潜れるんです。

深水の時は潮の流れている時休んで、潮止まりにしか潜れない。潜って上がって、その次に潜るまでの間を潮休みといっていました……。潮が止まるのは一日に四回ある。上げ潮が上げ切って止まって次に潮が下る迄の間、その間に潜るんです。

わかり易いというと、私らが潜っていたのは、浅い所では東京湾並み。東京湾のような浅い海では一ヶ月間に二十一日間は潜り、八日間は休む。そして相模湾並みの深い海では一ヶ月間で十二日間潜れるだけ……。まあ、私らが入れる程度の深さで、だいたい五十メートルぐらいが限度じゃないでしょうか。

五十メートルといっても深いですよ。底には十分間ぐらいしかいられない。潜る時は貝を入れる籠を持って降りるんです。降りてもらおうのではなく、自分で降りる。だから案内のロープを放りこんでおいて、それを伝って、自分の体に合せたスピードで降りて行くんです。

四、五十メートルになると、底につくまでにだいぶかかりますよ。十分近くかかるのではないかな。すつとは潜

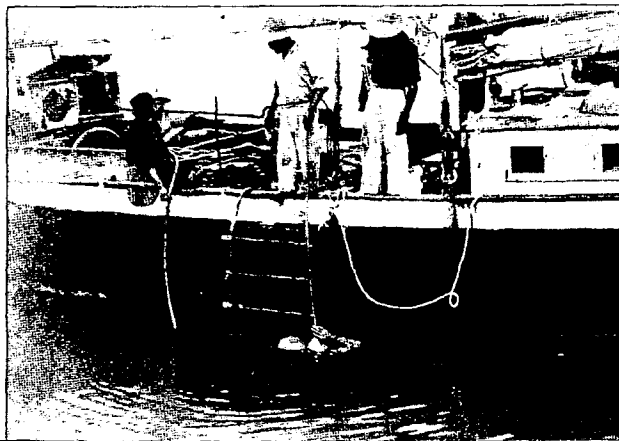


潜水していくダイバー。10-50メートル潜って白蝶貝を採っていた。潜水服や潜水器は当時総てイギリス製のもが使われていた。お金にはなるが大変危険な仕事だったという

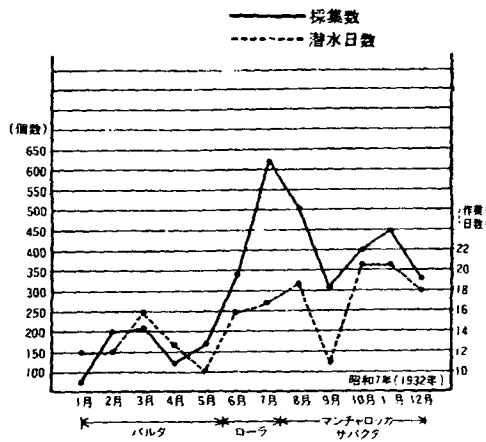
れませんか。潜っている時間はだいたい一日六回潜って四時間、十一回潜って六時間八分なんて記録もあります。深水の場合だと四回潜って都合一時間八分なんて記録があります。が、実際底にいるのは五分ぐらいのものですからね。二十メートルぐらいのところで一、二時間入ってられますよ。まあ、そんなに長く入っている必要ないから、上に戻りますけどね。

だけど、四、五十メートルではそうはいかない。圧力の関係でしようが、息が続くだけの体力があっても、目が見えなくなってしまう。目の先が黄色くなっちゃって……。あんな仕事はやるもんじゃありませんよ、できたら。

まあ、浅いサバクタで暮れの十一月初め頃まで潜りますかね。この間、さつきのマンチャロツカに行ったりしますが、それはほんの一潮だけです。また、八月の三十日か



●中林 茂さんの採貝日誌●



●中林さんは1931年から36年までの間の、潜水日時、潜水時間と回数、採貝個数、潜水場所などの記録「採集船日誌」をつけている。グラフは1932年度の記録をまとめたもの、表は日誌の一部を抜粋したものである

三十一日に隣のオランダ女まの祭りに、ちよつと、タンパ
ーナの根拠地に帰りますが、すぐ戻ってきて十一月の初め
までサバクタで潜る。
それから次はトベヤ諸島の方に行くんですよ。セレベス
島とムナ島の間のテイオラ・ストラート(テイオラ海峡)
で潜ります。ここで二潮ぐらい潜りますかね……。
テイオラ・ストラートは広いようでも、陸地は見えます。
山も見えますし、そういう目標がないと、私も潜るヤマ
が立てられないのです。よくヤマを立てるつてね、釣りでも
いいいますでしょう……。
テイオラ・ストラートはだいたい五マイル(約八キロ)
ぐらいあるんじゃないでしょうか。ただ漠然と海に潜つ
ても、どこにでも白蝶貝がある、というわけではないですか
ら。海底の状態、環境によって生物は変化しますから。そ
れで私もヤマを見て潜る……。それでリーフがいたると

1月上潮～ (場所・バルタ)				
月日	潜水回数	潜水時間	採取個数	備考
1.14	2	0.54	0	今日仕事初め
1.15	0	0	0	山出氏来たため仕事休む
1.16	5	1.59	17	
1.17	7	3.10	11	足をやられる。ローマテキにかかる
1.18	0	0	0	入港す
1.19	0	0	0	
1.20	0	0	0	今日が普通の入港日
1月下潮～ (場所・バルタ)				
1.27	0	0	0	出船
1.28	0	0	0	作業日なれど休業す
1.29	0	0	0	//
1.30	7	2.23	7	
1.31	7	2.35	6	
2.1	7	2.41	4	
2.2	6	4.07	18	
2.3	9	4.32	30	
2.4	6	3.04	17	入港
7月下潮～ (場所・サバクタ)				
7.22	6	3.13	14	他に小さな白蝶貝1個採取
7.23	8	5.56	36	
7.24	9	4.26	42	1回の採取個数20個(3月1日の17個の記録を破る)
7.25	9	6.25	34	小白蝶貝1個採取
7.26	9	5.18	25	
7.27	7	4.48	36	連絡船来る
7.28	8	5.22	56	3月1日の記録を破る。小白蝶貝2個
7.29	6	5.04	43	
7.30	10	5.34	62	7月28日の記録(56個)を破る
7.31	8	5.08	59	小白蝶貝2個
8.1	7	4.28	21	

8月上潮～ (場所・サバクタ)				
月日	潜水回数	潜水時間	採取個数	備考
8.6	6	4.03	17	
8.7	3	1.18	4	
8.8	9	5.19	55	
8.9	8	4.59	34	
8.10	11	5.28	24	
8.11	8	5.06	27	連絡船来る
8.12	12	5.26	34	
8.13	11	6.08	31	
8.14	8	5.54	45	
8.15	7	4.17	15	
8.16	4	2.14	8	
12月上潮～ (場所・サバクタ)				
12.1	5	3.17	17	小白蝶貝1個採取。原住民から白蝶貝71個を買う
12.2	9	5.03	20	
12.3	7	5.11	21	
12.4	8	5.25	24	
12.5	8	5.18	22	
12.6	3	1.40	5	作業不能
12.7	5	2.53	13	連絡船来る
12.8	8	5.28	32	
12.9	8	5.37	27	
12.10	7	4.41	15	作業不能
12.11	0	0	0	
12月下潮～ (場所・サバクタ)				
12.18	5	4.06	21	原住民から白蝶貝74個を買う
12.19	9	5.25	25	原住民から白蝶貝26個を買う
12.20	9	5.54	28	
12.21	9	5.07	15	
12.22	8	4.15	14	
12.23	12	4.17	12	
12.24	8	4.14	21	本日をもって本年作業終る

ころにあるでしょう。潮が引くと頭がでる、そういうところには棒を立てるわけです。ヤマを立てるために、あの木、あの山が九十度にある所の底には白蝶貝が多いとかね……。そういう米は、たいいていマングローブの適当な木を切っておつたてておくんです。一年ぐらいいしか持ちませぬけどね。

このトベヤ周辺のティオラ・ストラートで十二月の二十日過ぎ、最後の潮まで潜って適当に切り上げて、月末の二十九日か、三十日に、タンブーナの根拠地に帰ってくる。

こうして根拠地を離れて遠くに行っている間は、ずっとボートの上で暮らしてゐるんですよ。それは潮休みの時は島に上陸してみますよ。ちよつとした村もあるし、買物もあるしね。でも生活は全て船の中、キャビンの中でしたね。

●バジョー人のサメとナマコ●

バジョー人の海はサメの本場だよ。よさげな気さつはなごよなご。サメを捕つてはまじだかね

一年のうち八ヶ月間ぐらいいは根拠地を離れて出かけてるんですが、では採集した白蝶貝をどうしてたかつていうと、連絡船が定期的に来て、養殖場まで運ぶんです。ダイバーボートにも水槽があるし、連絡船にもそのための水槽があります。

連絡船は日を決めてきていました。一時、根拠地との間の連絡に伝書鳩を使ってみたこともありましたが、根拠地との連絡は余りできませんでしたがね……。でも、月に一回はやってきました。

連絡船で米や食糧なども一緒に運んでくるんです。米、

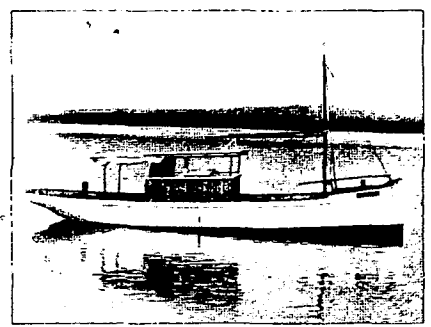
キャビンといつても、それはすごいもんですよ。東京の日雇いの人の泊るところ、あれより悪い……。

陸に上がれないのはサバクタで作業してる時でしたね。サバクタではどこも上がれない。砂の島ですから。他所のどこでも上陸しようと思えば上陸できたんですが。

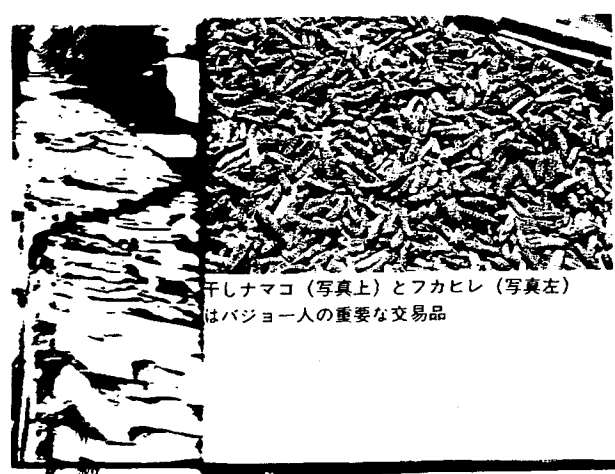
サバクタでは作業している所に船を留めて休んでました。ただ、船の水が不足してくるでしょう。この時はムナ島の川のとこまで行きましてね、その川の河口で休みました。水汲みは潮休みをしている日に行くんですが、丸木船を一隻買っておきまして、川上まで行って、その丸木船に水を汲んで曳いてくるんです。もつとも、そんな作業は私はいませんよ。船に乗ってる原住民の仕事でしたから。

塩、しょう油、それから野菜はタマネギ、コーヒー、コンテンスミルク、砂糖、石けん、マツチ、石油、その他まだまだありました。潜水用具も具合が悪くなると前の便で連絡しておくも持ってきました……。

米はセレベス島のマロスって、今のウジュンパンダンの飛行場のあるところ、その当時はマロスといっていたのですが、あの辺の米はいい米でしたよ。日本人が食べるのはマロスの米。原住民の食べるのは日本という南京米のような米でしたね。もつともボートに乗っている間は、皆、同じ米を食べますが、根拠地に帰ると、いい米は私とテナ



ダイバーボートと養殖場を結んでいた連絡船。ダイバーボートに食糧を運び、ダイバーの採った白蝶貝は養殖場に運んでいた



干しナマコ（写真上）とフカヒレ（写真左）はバジョー人の重要な交易品

「だけ……。潜る人と潜る人の縄を持っている人だけです。だからテンダは原住民でも待遇は日本人待遇です。会社から私とテンダには副食代として一日二十五銭ですが、その他の人に対しては十銭でした。それで現場で、土地の人から鶏とかを買って食べてるわけです。」

野菜は乏しかったね。例えば日本からナスなり何なりの種を持って行くでしょ。本当は黙って持って行ってはいけないんですがね。その種を播くと、一年目はいい野菜がでるんですよ。それで、それから種とって播くと、それはもうボケちゃってて、いい野菜がでないんです。

でもナスもトマトもあるんです。ナスは暑い所ですから年がら年中ありました。それで何年でも枯れないんで、凄いですよ。木のようになるんです。一本で八畳の部屋一杯ぐらになるんです……。それこそ皮と種ばつかしのカチカチのナス……。それでも野菜といえれば野菜ですから。トマトは小さな粒でしたな。

その他ではレイシというニガウリみたいなものもありました。それをゆでて食べるのですよ、野菜がわりに原住民は……。場合によってはバナナの花、紫色の花びらで、これはスイキみたいなものですが、スープにするとおいしかったです。

それからワラビがありましたか。ワラビはいろんな種類があるもんですね。原住民はアジミみたいな魚と一緒に、油でいためて食べてましたがね。

魚は私らも釣ったが、根拠地の付近ではカンボン(村)の連中も釣ったりしてましてね。それを買った。だから魚は豊富だったですよ。それにムナ島とセレベス島との間の

浅い海では、養建てこころのかな、日本にあるのと同じような方式で魚を捕っていますよ。魚でもエビでもね。それからハート型をしたバカニといったかな、竹で編んだ籠、それを海に放りこんでおくと、勝手に魚が入ってくるんだな、潮に乗って。このバカニでは十一月頃になると大きなエビがたくさん捕れますよ。ところが、いくらエビがたくさん捕れても、原住民は余計に捕って商売にしようという気は全くないんだな……。今はどうか知りませんが、当時は浅いところにはナマコも多かったですね。タリパンススというのがあるんです。タリパンというのは現地語で、ナマコ。ススは乳。乳のような突起がいくつもあるナマコがいるんです。これは私らも捕った。今度、根拠地に帰ったら食べようか、といって、適当な数を捕って、腹を割って中を出して干しておく。で、根拠地に帰って大潮で休みの時、アヒルの肉とかキクラゲとかタマネギを混ぜて料理するんですよ。そりゃあ、うまいですよ。タリパンススは……。

現地の人はこのタリパンススは食べませんね。別の種類のナマコはその場で、煮てすぐに食べてましたが、タリパンイリという小型の黒いのは多かった。でも私ら商売ではありませんし、自分らの必要な分を捕るだけでした。

カキも採りましたよ。おかずにからカキ採ってやれ、さあ、カキ採ろうと思っていると、思うようになくてねえ、でも自分らの食べる分くらいは採れましたが、……。潜っていて気をつけたのはサメですね。サメは多いんですよ。原住民というか、アウトリガー付きの丸木船に一家族が乗りこんで、海の上で暮らしているバジヨール人というのがありますが、彼等はナマコを拾ったり、サメを捕った

※ナマコとフカヒレ

中国料理に欠かすことのできないナマコ、フカヒレは、当時からこの地域の重要な交易品であった。これは現在でも変わっていない。ブトン島からさらに東部の地域、とくにアルー諸島は、白蝶貝だけでなくナマコやフカヒレ漁の中心地でもあった。ドボがその根拠地になっていた。

ドボやブトンで獲れたナマコやフカヒレは、マカツサル(ウジュンパンダン)に集められて中国へ輸出される。

ナマコやフカヒレはバジヨール人の手によって獲られる場合が多いが、バジヨール人はインドネシア社会のなかでは差別されている人たちである。彼らが漂海民で、定着しないことが差別される理由のひとつである。生活レベルは交易品のおかげでかなり良い。彼らの交易品は、ナマコ、フカヒレのほかにも、海藻、燕の巣、べっこうなどがある。



りしてたようですね。

このあたりはサメの本場です。だからサメのヒレを取って中国人に売ります。彼らはウナギをサメの餌にするんです。それはサメの好物。彼らはウナギを食べない。我日本人は好きだが、私らウナギは喰わなかった。土地の人の喰わんものは私らも喰わなかった。

サメの肉は食べます。だいたいサメの場合はいくつにします。ゲンコツぐらいの大きさに切って、串に刺して、火であぶってくん製にします。そしてそれを海から離れた奥地の人と物々交換していました。

バジョー人も潜りは達者ですよ。素潜りで十メートルぐらい潜りますが、泳ぎも達者なものです。家の下は海だから。

バジョー人がサメに喰われたなんていうのも時々聞きました。だから私らも潜水服を着ていても、よほど気をつけ

●潜水病にかかる●

アラララ海では潜水病で何百人と死んでござるじやう。ダイバーは、金と命の交換ですから、大金貰わなくっちゃあつたまらなすよ。

ダイバーは危険な仕事でしたね。私らが潜れる限度というの、だいたい五十メートルぐらいじゃありませんか。五十メートルといつても深いですよ。底には十分ぐらいしかいられない。もう日が変になる。目が黄色くなつて何も見えなくなります。だから大金を貰わなくっちゃ勤まる商売じゃない。命と引き換えだから。

私も盛りの頃は相当ね、いい月は、月に六〇〇円ぐらい

ないと。サメというのは日はこんなところにあつて、口はこんなところにある。あんな不細工な魚はないわけです。バクツと喰つたつて、目と口の距離があるから、とんでもないところを喰んでみたりする。だから危い。

私らも、今日のおかずにと伊勢エビを捕ると、籠に入れて、すぐ上へ上げちまう。サメの好物ですから。上に上げるのが面倒くさいといつて、腰へぶら下げていると、サメは私を目当てでなしに、エビを目当てにするつてことがあります。それでガバツとやられる。そういうことは最初に気をつけて、捕つたらすぐに上に上げちやう。

沖繩の糸満の人なんかインドネシアではずいぶんやられていまして。まあ、いろんなことをいいますよ。長い越中ふんどしをぶらさげていればいいとか、あれがいいとか、本当のところは私ら知る由もありませんが、私らはこういう風に気をつけていました。

になりましたからなあ。当時六〇〇円なんていうと、大変ですよ。普通の人は、一年働いても稼げない。

自分のこといつちやあれだけでも、親の借金三千円つて、八年で返しました。昭和のはじめですから、三千円つて大変ですよ。

白蝶貝は一日六十も採れば多い方じゃないでしょうか。潮の流れ、潮の干満がありますから、朝から晩まで潜れる

●バジョー人

スルエ海、セレベス海、バンダ海などの島々を戸々としながら漁をしている漁民で、「海のジブシー」・「島の放浪者」とも呼ばれる。彼らの居場所はいりピン、マシア、インドネシアなどに属しているが、彼ら自身にはそれぞれの国の国民という意識は薄い。むしろ、海を共通の生活場所、仕事場とするバジョー人としての連帯感のほうが強い。スラウエシ島は特にバジョー人が多いところ。



海のなかに突き出たバジョー人部落。家と家をつなぐのは彼らの足となっている舟 (写真=鶴見良行)

っていうもんじゃない。

白塚貝一個三十銭の報償金を会社が出すわけてす。五十個採ったとして十五円ですよ。十五円なら給料の半月分です。給料は基本給が三十円です。いい時はどこかの一流会社の社長よりいい。

しかし、私らにすれば、それぐらい貰わなくっちゃ合わない。ダイバーってのは潜水病てのがあてりましょう。これが命にかかわる……。

潜水病はパラリスっていうんですがね。アラフラ海ではいぶんこれで死んでますよ。どつかで聞いたんだが、昭和十一年だったかな、十四人死んだって聞きましたね。

潜水病の他にはローマテキっていう病気もありましたね。こりゃあ、オーストラリアの言葉ですよ。急性リュウマチに思わんですが、それで関節にくる。こりゃあ、痛いで

ッよ。ああいうところだから薬がないわけですよ。で、昔からの習いでしょうが、フライパンで塩を熱してそれをバナナの葉に包んで痛い箇所当てる。いやあ、これは悲鳴

あげるくらい熱い。で、今度は熱いのと痛いので、あんに、もうたまらんですよ。それでも夕方にローマテキにか

つても、翌日には痛いのは治ります。ゲツソリ瘦せませすどね……。

けど、パラリスはそうはいかない。これには私もかかりました。もう死にそなつたんですよ。これで私は誰か代のダイバーがきたら、ダイバーを辞めようと思つたんですから。それで会社に申し出て、後で辞めました。

潜水病にかかったのはダイバーをはじめて五、六年たつ頃だったですね。九月でしたか、マンチャロッカの深い

海で、深く潜らないとかなりませんから、四十、五十メートルぐらいじゃなかったでしょう。

それで何回か潜って白塚貝を四十五個拾ったんですよ。ああ、もう五個拾えば五十個になるなあ、と、じゃあ、俺もう一回潜ってもう一つ拾ったら上がるからなあ、と、

潜った。お昼の一時頃だったかなあ、ご飯食べてからだから。それで潜ってね、上がる時は引つ張り上げてもらおうので

すが、二十メートルくらいのとこまで上つてきて、いつたん止まり、そこで二十分くらいぶらさがっている。体を水

圧に順応させるんです。そして次は十メートルくらいまで上がって、そこでまた十分休む。

その十メートルくらいのとこまできたら、気分が悪くなつてねえ。こりゃあ、パラリスがきたな、と思つたら、上まで引き上げられた。そこで意識不明になつたんですよ。

船の上の者は、「あつ、こりゃあ、変だぞ」というので、また下に降ろしたんじゃないですか。で、ハッと気がついて、あたりは真暗なんです。で、なんせ寒くて、冷たいですからねえ、長く海に吊されていると、海水がドレス

の中にしみ込みますから。で、上へ上がる合図をしたんです。上つたら夜の七時頃でしたから、六時間ぐらい吊されていたんですかね。

船上には他の日本人ダイバーが駆けつけてきて、彼が私のガラスを取った。だが、まだ駄目だ、てんで、またガラスやって、ポーンと海に放りこまれた。それで十一

時頃まで海の中に吊されてましたかね。どうにも冷たくつてしようがないから、上に合図したんですよ。今度は大丈

●鳳教真珠養殖試験場●

ブトン島にあつた三菱の真珠養殖場は当時の名称では「鳳教真珠養殖試験場」であつたが、ここでは、島の今日の呼び方に順じてブトンとしている。

大正十一年、認可を得て養殖試験場を築足させた後の「ブトン養殖試験場」の歴史を簡略に記す。

大正十四年、半円真珠の養殖開始。昭和二年、真円真珠養殖技術確立。昭和七年、独立採算が可能となる。

三菱本社工資の下に、東京に販売会社「南洋真珠(株)」、資本金三十万円、代表取締役伊藤信愛氏と、生産会社として Beios Pearl

Co., Ltd. (本店スラバヤ、養殖場ブトン、取締役小川平三氏、三菱商事スラバヤ支店長) を設立。

昭和十年、委任統治「パラオ」で試験的に養殖開始。パラオ群島コロール島に南洋真珠(株)の養殖場

設置(所長橋本重男、技術者石川伍平、和田連二など)。

昭和十六年、開戦によりブトン養殖場の職員、オーストラリアに抑留される。パラオの養殖場では、職員の引揚げ始まる。

夫でしたが……そういう経験があるんですよ。

それで翌日はケロツと、という具合にはいかないですね。翌日もやっぱり体が痛く、どこか重くて、全体的に動作が鈍いというか、動かさませんでしたね。

潜水病になつても案外周囲は驚きませんね。でも、例えばローマテキで関節やられた時なんか、皆が笑っていますよ。「お前、金鱈に喰らいつかれたんだ」って。関節にお金が喰らいついたんだ、というですね。

実際ダイバーはお金と体や命の交換をやつてますからね。何の教育のない者でも、すこいお金儲ができる。例えばその病氣もらつた時は貝を五十個拾つた。ということはオランダのお金で十五ギルダーの報償金になつた……、てことは、当時の為替レートで日本円に換えると二十円ぐらい……。

一日で二十円ですよ。当時、普通の人は一日働いて一円か一円五十銭の時代ですよ。だから、金鱈が喰らいついたなんていわれる。でも、潜水病の時は何百人と命が危ないんですから。潜水病でアラフラ海では何百人と死んでいるんですからなあ、不幸じゃなあ、昔は……。

アラフラ海で潜っていた人は紀州の人が多かつたんですね。事故で死ぬというのは二十五歳ぐらいまでで、その辺が一番危い。元気がいい、体力があるから無理をする。無理をしても自然の力にはかなわない。それで死んでしまう。それを越えようと、人間はずるくなる。よくコツを知っているというでしょう。コツを知ってくるわけです。あつ、これは変だな、これはあかん、これはやめようって。何となく予感が働くんです。ところが、二十五までのヤツは第六感なんか働かないですから、あるのは元氣だけだ。

うちの会社では事故はありませんが。そんな無理はしません。会社の方針がやまっていますよ。三菱とさるうが、そんな変な、恥ずかしい思いはするなど。

死んだのはトボ、木曜島あたりです。木曜島のダイバーの親方は外人でしょう。外人だからそういう管理はしない。ただボートをやって、食料やって、道具をやって、貝を採らすだけ。あとは知つたことじゃない。人の管理なんてものはやりませんから。

私たちがダイバーは怪我したら潜れませんがね。無茶な遊びはしないんですよ。鉄砲打ちに山に行つても、装備はきちんとして怪我しないように、それは細心の注意をしましたよ。

病氣というのもあまりしませんでしたね。私は医者でないから知りませんが、伝染病にもかかりませんでした。多分、人の交流が全くないっていいほどないから、菌が移つてこないんじゃないですか。コレラなんてのも、今は、外国に行つてはもらつてきてますか、私らはそんなことはなかつた。

ただ怖い病氣はというと、ニッセイ潰瘍。ポツと穴が開いてきまして、体方の弱い人は、熱も出たりして大変でした。足に潰瘍ができるんです。会社の奥さん連中でわづらつた人もいます。

マラリアは風土病ですから、これはしょうがない。私は行つた翌年にかかりました。ある時、もの凄く熱いんですよ……体が、もう、焼けるほど熱くて、しかし意識はしっかりしているんですよ。で、おかしいなと思つて体温計で計つてみたら、四十一度か二度あつた。そこでキニーネ飲ん



アルー諸島のトボに残る元ダイバーの墓石。和歌山県東牟婁郡大島と読める

日本人ダイバーの死亡者数
大塚忠で死して日本人の数は確認されただけで五二五名に達する。このうち、三二四名は和歌山(紀州)出身の人たちだった、木曜島を含むトレス海峡諸島における日本人死亡数を年別に示すと左の表のようになる。

年度(五年毎)	死亡者数
一八八四〜八八	一六
一八八九〜九三	一一
一八九四〜九八	九七
一九〇一〜〇三	七九
一九〇四〜〇八	七四
一九〇九〜一三	二六
一九一四〜一八	三一
一九一九〜二三	二二
一九二四〜二八	一六
一九二九〜三三	一七
一九三四〜三八	二二
一九三九〜四一	一〇
合計	五二一

だんです。キニーネは会社から皆に支給されていた。あれ飲むと胃を侵されるんでね。でもマラリアにかかると、飲まずにはいられない。すると適当な時期に治りやすから。それからすつーと三年間はマラリアにかからなかった。

体力があつたんですね。「強い！」って、皆に驚かれたんですわ。さあ、三年たつたら今度はチヨイチヨイかかった。

だからマラリアは私ら病氣だとは思っていなかった。かかたらキニーネ飲むか、つてなものですよ。

急性肺炎はチヨイチヨイありましたね。肺炎はそれこそあつという間に死んじゃう。ところが我々は、いくら抵抗があるから、かからない。向こうの言葉で「サキツサブ

●真珠の育つ海

養殖に適した目は人間なら十八、九歳。貝なら生まれ三、四年目……
娘十八、番茶も出花と、いっしょになつたら手術するんです

私たちの白蝶貝の採集は、貝を殺さない、養殖するという事で、オランダ政府から許可になつてゐるんです。日本でもそうですが、アワビの小さい、十センチ以下は採つてはいけないことになつてゐるでしょう。

白蝶貝も同じで原則としては採つてはいけない。けれど、我々は貝を殺さず養殖するという条件で、小さいのも採つていい。こういう意味で許可になつてゐた。もし、原住民が潜つて採るんでしたら十センチ以下はいけない。

で採つてきた貝は根拠地の養殖場に持ってきますね。そうすると貝を採つた海と、養殖場は、海の条件が違ふので、貝を養殖場の海で慣らすわけです。海底の条件、潮の流れも

ラ」というんですがね。抵抗力のない現地の人はかかつて、アレッツという間に死んじゃつた、ということがありましたね。

私は品行方正だったから、例の病氣にもかからない。だから病氣なんか、ほとんどしなかつたんですよ。何年たつたつて同じ人の顔しか見えない。だから伝染病にはかからない。でも、浦島太郎になるんですよ。根拠地のタンブーナだけではないですよ。首都のパウパウだつて定期船が寄るのは三週間に一回でしょう。で、他所から来るのは、ブギス、の船が交易に来るぐらいでしたからね……。

違いますからね。慣らすところは十メートルばかりの浅い海です。養殖場自体は十五メートルぐらいの深さですがね。

そうして慣らして貝の体力をつけてから、今度は真珠になる核を貝の中に入れて、放棄というんですか、海の中に入れておきます。

核を入れるのは先にもお話したように宇和島の菅原さんでした。朝から夕方まで、養殖場の棧橋の先でやつていましたね。白蝶貝の核入れは、私は担当じゃないから詳しくは知らない。というより秘密ですから。ひとつの白蝶貝に核は三つぐらい入れるんじゃないでしょうか。貝のどこに入れるのか、内臓の中でしょうけど、よくわかりません。



養殖場に働く人びとの娯楽には鹿狩りや玉突きがあった。鹿肉は重要な食糧でもあった

※養殖真珠の核

養殖真珠の核にはアメリカのミシシッピ川に産する、ミシシッピドブガイ、ビッグトフ、ニガヘッドなどと俗称される、殻の厚みが十二ミリ〜二十ミリに達するイシガイ類ドブガイ亜科の二枚貝の殻が用いられた。

(本曜島で死亡した日本人数五二五名と表の合計数五二一名は異なるが、これは調査者が異なることによる) なお、出典は大島襄二編『トレス海峡の人々』古今書院、昭和五八年)

固く閉じた貝の口をどうして開かせたかという、無理にこじ開けるようなことはしませんよ。開けようたつて開くものではない。口を閉じる力は強いものですよ。指なんかつぶれてしまう。坂井百助さんなんか、指の先が二本ぐらいがつぶれてましたからね。貝に噛まれたんですよ。大きな籠にね、貝を立てておくんですよ。そうすると、パアツと自然に口を開けますから。そしたら楔をバクツと入れておくんです。そうやって手術する。

核は小豆つぶくらいのものでした。これはアメリカのミシシッピー川の貝を輸入して、日本で丸く加工するんです。カキと同じように二枚貝です。そして、殻が厚いんです。厚くないと丸味が出ませんから。それが高価な真珠になるんですからね。

核を入れて海に入れると、今度あげるのには三ヶ月後です。それで三ヶ月たったら一度あげてみて、核が入っているか調べて、入ってなければ、また核を入れる。吐き出す貝もありますからね。入っていればそのまま海に入れ放棄して、また三ヶ月。

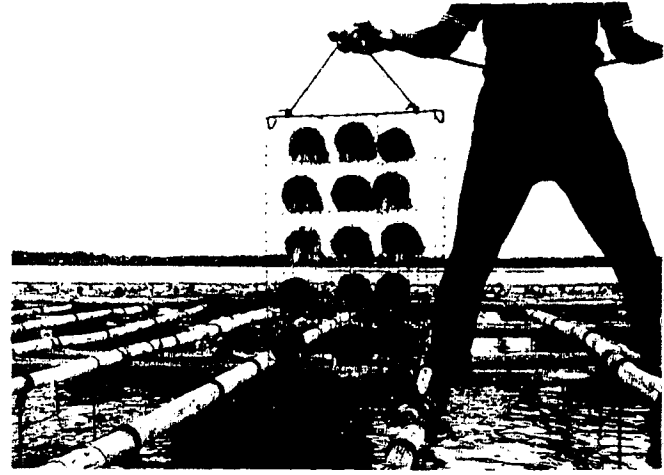
三ヶ月毎に上げて調べるんです。貝の回りにもいろんなものが付いてきますから、呼吸し易いようにきれいにとって、籠も貝の成長に応じて大きいのに変えるんですね。

二回ほど上げると、いい玉ができるかどうか、だいたい見当がつきます。手術する人の腕によって上手下手がありますが、菅原さんっていう人は、上手だったんですが、百パーセントっていうのは無理です。貝にもよりますしね。

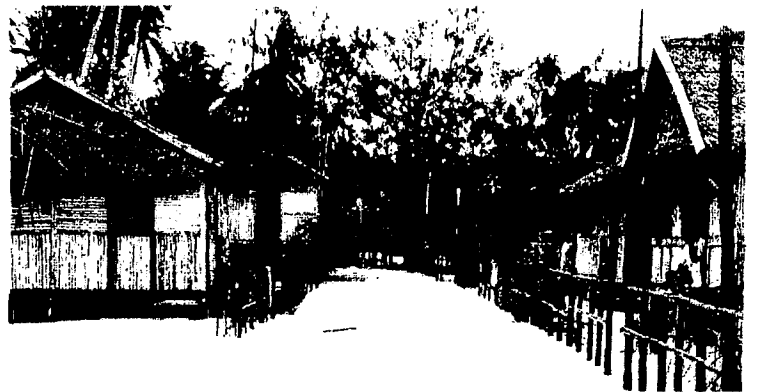
真珠の養殖に適した貝っていうと、そうですね、人間でいうと、十八、九歳ぐらいが一番いいですね。貝なら三、



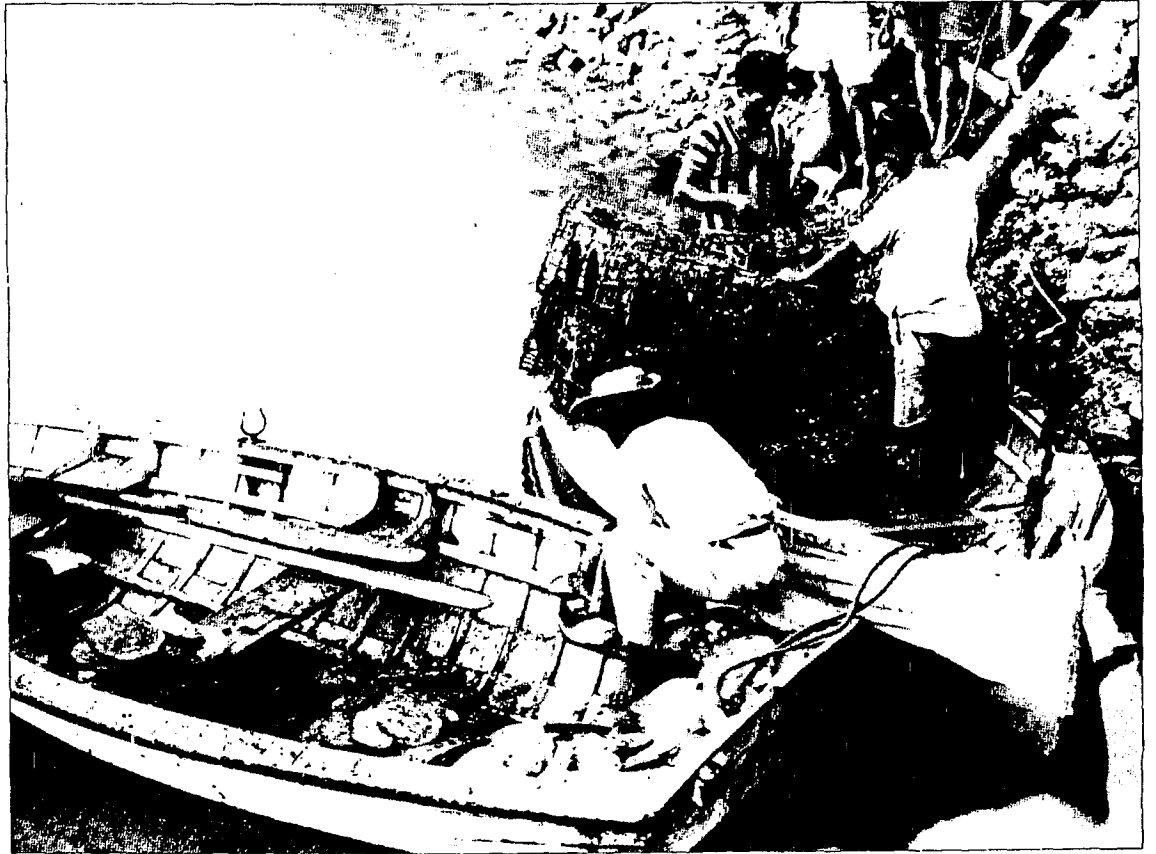
養殖場で白蝶貝を放棄するために入れる籠は、作業場で現地の労働者によって作られている (写真=福家洋介)



アルー諸島のドボの近くにある真珠養殖場。アルー海域で採られた白蝶貝は、養殖場の水に慣らすために写真のように吊されている



上・養殖場のそばには、労働者たちの住居が整然と並んでいる (写真=福家洋介)
左・白蝶貝は現在、アルー諸島の業潜りダイバーたちが採っている (写真=福家洋介)



核を入れ放養した白蝶貝は、三ヶ月ごとに引き上げ、付着した藻類を取り除き、また海に帰した

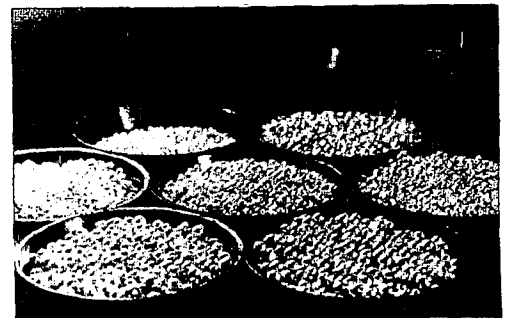


白蝶貝の成長につれて、養殖用の籠を大きいものに取り換えた。そのときには労働者が総出してこれを行なった

ブトン養殖場で生産された真珠。真珠になるには3年から4年かかった



金網の籠に入れられた貝は、海底に張ったワイヤーに結びつけて放養した。貝は口を上に向けて籠に入れた



四年ぐらいのものでしようかね。ダイバーは貝の大小を構わず採る。それを養殖場で生かしておいて、娘十八、番茶も出花という風になったら、手術するわけです。大ききさという二十センチくらいですわな、と思いますが。

まあ、そうして大事にして、上手な人が手術すると、百個やつて三ヶ月後に死ぬのは五個以内じゃなかったでしょうか。下手な人は、二十個も三十個も殺します。

それでどのようにして海に入れておくかといいますと、海底に百メートルの長さで六番線くらいの針金を張っておくわけです。針金の両端にはセメントの重りをつけて沈めておくんです。それに六個の母貝を入れた籠をしぼりつけておくんです。こう、常に新しい潮が籠に当たるように、うまく配置してね。何個の籠をしぼるのかは知りません。私の担当じゃないから。でも相当つけてありますわ。

この母貝を沈めている海は養殖場の前の海ですが、浮標は立ててません。貝があるってことを知らせる事になりますから。盗る者としてないのですが、要心してらんです。

余談になりますが、白蝶貝の貝柱はおいしいんですよ。原住民も食べてるでしょうね。この貝柱を天ぷらにしてごらんなさい。もう、こたえられない。立派な貝柱ですからね。あんまりおいしんで、会社では、減多に私には食事に出不さい。妄りに食べさせると味をしめて、食べたがるから……。

それで、核いれて海に沈めてから約三十四年で真珠ができます。そうしますと、真珠だけを取出して、その貝にまた核を入れて養殖するんです。日本のアコヤ貝だと、そんな手のかかることをしていたら商売にならない。真珠も

小さいですしね。また、そんなことしなくとも、母貝もたくさんありますから。アコヤ貝は包丁を入れて、開いて、いわば殺して真珠を取り出すんですな。

白蝶貝はそうじゃない。籠に立てておきますと、ブワツと口を開けますわな。そこへ楔をバツと入れる。それの中の真珠を出して、また別な核を入れて、楔を抜いて、また放養する。だから貝は殺さない。貝の方で死ぬのは仕方ないですよ。だけど故意には殺しません。

でも白蝶貝を養殖に使えるのは、せいぜい二回ぐらいでしょう。三回目ぐらいになりますと、成長が鈍りますから成長が鈍るってことは、貝は大きくならないのに、殻ばかり厚くなるんです。こういう老貝は核を入れても真珠の成長が鈍いわけです。

てきた真珠はこちらで選別して日本に送るんです。それの一部はパリの三菱商事に送ったかも知れませんが、貝の中には天然真珠を抱えているものがあるわけですよ。大なり小なり……。その中の丸い、いいものを核にして貝に入れて、よりよい真珠を作ろうとしたんですよ。そうしたら一部はパリに送ったもんじゃありませんか。

だけど、ほとんどの真珠は日本に送っていた。そして、日本ではそれを再選別して、それで販売したんですよ。でも、今のようには装飾品を揃も杓子も、という時代じゃないです。今から思うようにはいかなかったんですよ……。後には丸ノ内にあった南洋真珠株式会社が発売したようですよ。三菱商事はご承知のとおり、真珠ばかり扱っている訳でも専門でもない。それで販売の方はあんまりうまくいかなかったと思いますよ……。

※ブトン島の真珠生産量

ブトン島及びパラオ島での真珠生産量は以下の表のようであった。尚、パラオ島での真珠養殖は、ブトン島での真珠養殖の成功により、昭和十年に三菱合資会社が出資して、南洋真珠(株)を設立し、養殖場を設置した。ブトン島で開発した白蝶貝による養殖技術はパラオ島でもそのまま受けつられた。

年次(昭和)	ブトン島生産量(担)	パラオ島生産量(担)	合計(担)
6	250		250
7	1,000		1,000
8	3,300		3,300
9	4,200		4,200
10	5,300		5,300
11	5,300		5,300
12	4,500		4,500
13	3,200		3,200
14	3,000		3,000
15	2,800		2,800
16	2,800		2,800
18	5,000		5,000
合計	39,700	10,900	50,600

(注) 数量は一部推定を含む。
出典：「白蝶真珠生立ちの記」池田晋

●七年ぶりの休暇●

昭和十三年でしたか、ダイバーを辞めたのは。休暇をとった翌年です。それからには連絡船の機関長や船長をやっています。

私は長いこと内地には帰れませんでしたよ。運が悪くてね。オランダが交代の人間の入国をなかなか認めてくれなくてね、仕方なかったんですが。

休暇で日本に帰るのはだいたい三年から五年の間に一回、職員、つまり学校出の人ね、この人らはだいたい三年に一回内地に帰れる。三年に一回で、内地に約九十日の滞在が普通。それで、往復していると、だいたい五ヶ月から半年かかります。船も時速三マイルから五マイルで、トロトロ走つてますから、遅くてね。

私のような教育のない者の休暇は五年に一回。これは情けなかつたですね。昔は教育のない者はどこの会社でも一人前扱いじゃないですからね。戦争に敗けたお陰で、私も一人前に扱かれる世の中になれたんで……今では、平等で努力次第で抜擢してくれますからね。

そういうこともあつて私が休暇をとれたのは昭和十二年になってからでした。丸七年ぶりに内地に帰れたんです。十二年の正月早々に向こうを出てマカッサルから船に乗つて、神戸に上陸して、家に着いたのは二月八日だったかな。

あの時代は面白いですよ。船に乗ると、海が時化ようと時化まいと、乗客が食べようと食べまいと、既定の量のご飯を炊くんですね。それで海が時化ると、皆、ご飯を食べられないでしょう。で、残ったご飯は全部、厨房の者が共

同で干しておくんです。そして、「おこし」を焼く。

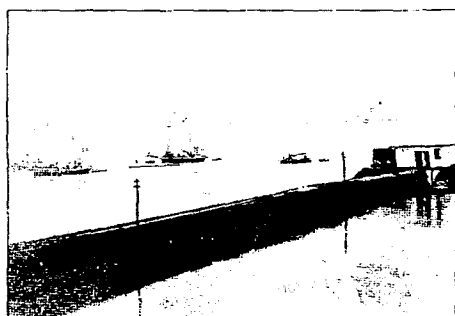
また当時は、向こうは砂糖はザラメだけと安いんですね。それを乗組員が、うんと買込んで船に積んでおくんです。

そして上陸前に、「中林さん、あんた砂糖を持ってるか」と聞くんで、「持ってない」と答えると、「じゃあ、あんたの名前を借して下さい」と、いうんです。当時、外国から砂糖一俵は無税で持ちこめたんです。名前を借りると、余計に持ち込めることになりましたよ。そして、これが船員の余録になっていたんですね。「おこし」の方も、上陸してから売ります。やっぱり余録ですよ。

この休暇から帰った翌年の十三年でしたか、私がダイバーを辞めたのは。内地から代りのダイバーが来ましたから。鈴木直次さんといって、今は大洋漁業に勤めてますが、彼が私の後輩というか、オリエント号のダイバーになったわけです。昭和十三年から。

代りの人が来たつてことは、だれかが辞めて日本に帰つて、その人の旅券の枠を利用したつてことですがね。新規にはオランダはなかなかビザを出さないんです。

陸に上がつてからは、島野竹松さんがそうしたように、連絡船の機関長や船長をやったんです。収入はダイバーの時よりはガクッと減りましたがね。月給分だけです。それでも百四、五十円にはなつたかな。日本内地の課長よりはいい給料ですよ。だけど、そうになると、やっぱりお金



養殖場の前のバルタ海に浮ぶダイバーボート
向こうの島はムナ島



漂海民パジョーも少しずつ定着している。陸上を生活の場とするパジョー人が出現するかも知れない

写真=福家洋介

ぬえし、陸にいます。

どうでしょうが、外国勤務は給料の他に手当が付くやつていてもお金は残る。当時、中学校出が本内。普通一般は三十円。いい会社だと、三十五円。外手当が五十円付く。それで年々、給与は上がって兵糧も宿舍も支給となると、別にお金遣うこともお金は残つてしょうがないですよ。

遣う気になれば、いくらでも遣えますよ。パウけば女はいるし、酒はあるし、博打もビリヤード茶もある。博打は花札やサイコロやトランプなど酒もあった。

酒はあるにはあつたが、もの凄い防腐剤入りでしよつといい気になつて、酒やビールの二、三本でものなら、頭がピンピン痛くなりましたね。ウイ安かつたです。私は驚いたですよ。昭和十二年の本に帰つてみると、内地ではウイスキー一本が十円で。ヘエトと思ひましたね。向こうだつたら四ギ。アンパツルビアかりマルビア（四・五ルビア）ツチウイスキーが買えるんですから。そりゃあ、

● 眞珠養殖の終末

ランダの兵隊が突然やつて来て、鉄砲を突撃してはたしてやめ。でも私は戦争が始まつたのに気がかない。いつたか何だと思つた

て、連絡船の船長をやつてゐる昭和十六年の十二、したか、養殖場に海からと陸からとオランダの兵二十人ぐらい来たわけです。ところが、兵隊を見て

ウイスキーは安かつた。

ドロクもあるし、それを蒸留した酒もあつた。透明な液で、買つて瓶に入れて、しばらく涼しい所に置いておくと、コバルト色になつてねえ。それで火をつけるとポツと燃える。ソツピーという酒でしたが、それを専門に作る村もあつたんですよ。グランバという村で、だから私はソツピーをグランバといつてましたが、本来ブトン人はイスラム教で、酒を飲んではいかんのだが、ブトン人は平気のへつちやうで酒を飲んでました。

まあ、そんなわけで金の遣い遣いはいくらでもある。

こういつちやあ、なんですすが、私は日本では悪遊がはしたことはないですよ。が、向こうでは一通りのことはやつてみた。三十歳をすぎて覚えてたんです。それで、酒も博打もやつたが、自分の小遣い銭の範囲を出るような、そんな馬鹿は、したことはないですね。

その頃はまだ一人身だつたし、私が結婚したのは戦後、内地に帰つてからですよ……それでブトンでは多少は遊んだが、それでも品行方正の枠は守つておつたつもりなんですよ。

いても、私たちは太平洋戦争が始まつたのが、わからんのだから……。

私は機械室にいて機械を動かそうとしたところに、三人



三隊員が採れる海はまた人びとが行き来する道でもある
(写真=福家洋介)

の兵隊がピアツと来まして、鉄砲つきつけて……それでも私はまだ気がつかなかった。一体、「何だ」と思った。

そうしていると、事務所の方から私の所へ「中林君、鉄砲渡して」という連絡が来た。猟銃を持ってましたから。

それにピストルも一丁あったし。それで、自分の部屋へ行って鉄砲を渡した。それで、荷物の整理しようと思つて行きかけたなら、「中林君、そんな行かなくてもいいんだ」というんですよ。

それで、「どうしたんですか」と聞いたなら、「今朝、戦争が始まったよ」というもんですから、「ヘー」と、ポカンと

なった。会社には短波のラジオ受信機がある。ところが、何か大きな事件のある一週間ぐらい前になると、必ず故障しやがる。ドイツ製の短波ラジオだが、第二次大戦のドイツが戦線を超した時も故障、ヒトラーがソ連に戦争布告をした時も故障。日本が参戦する一週間前も故障して、さっぱりわからなかった。

ただ、スラバヤの支店から十二月の五日に、遅くとも十五日まで全員スラバヤに来いという電報が入った。しかし、この定期船は三週間に一回しかないので、予定を見たら駄目なんです。それで一日でも早く行くんじゃないかというので、バウバウの政府に交渉に行つたわけです。会社の船がありますので、それでセレベスに渡る許可をくれと。

そしたら、お前の会社はオランダとの契約で、バウバウを中心には百五十マイル以内だ。それ以上は出られないから駄目だ」というんです。

それにしてもいつでも出発できるように用意しようじゃないかということになって、六日の日にムナ島方面で仕事をしている者を、私が迎えに行つてきた。全員、会社に集めた。

それで、全員、荷物を整理しようという結論になって、「明日からやるや」といって、十二月八日の朝、始めたところに、兵隊がやって来たんですよ。

それで日本人は皆、といつても当時、八人しか残っていませんでしたが、オランダの兵隊が、これから、バウバウに行つてもう一つ持つてる物は何を持って行つてもいいから仕度しなさい」といふ、そういう命令だった。

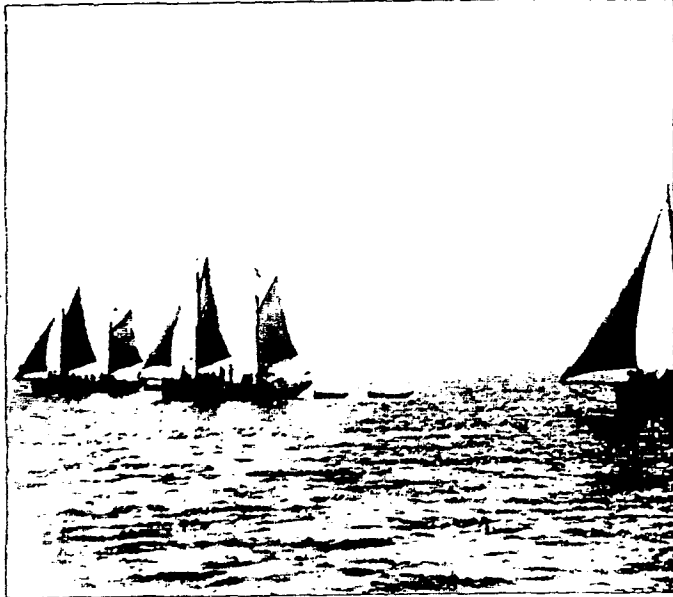
そこで、自分の身のまわりの物を持って、オランダの船に運んで、会社の食糧をみんな積みこんで、バウバウに行つたんです。バウバウでは兵舎の倉庫にいれられて、それまで使っていた原住民の給与を鉄条網ごしに支払つて、その後のことは戦争ですから、どうなるかわからないというので、かえつて落着いた気分になりましたね。

結局、バウバウの倉庫には一週間いました。それからブトン島をバトロローとするオランダの船に兵せられて、センベス島のワタンボネに上陸させられて、そこからトラックでセンカンに、センカンに二週間いて、月末の三十日に、一度すごい雨期の時期でしたが、マカッサルに移動した。そこからは三千、四千トンの船のドン底に、これがひどいんですよ、電燈もない真暗な中に入れられて、スラバヤに送られました。

マカッサルにはセレベスのメナドやモルッカ諸島などから、七、八十人ぐらいの日本人が集められてましたね。子



ブトン島の首都バウバウの川船。船は食堂になり、客は海のなかで食事をする（写真＝鷗見良行）



ダイバーボートは、オランダ政府が動力の使用を禁止していたのですべて帆船だった。現在でも、帆船が数の上では圧倒的に多い

供もいましてね。そういつては何ですが、ウチは三菱で大
 会社でしょう。手際がいいから、昭和十六年の八月に、オ
 ランダが外国の会社の資金凍結をした時に、ブトンやその
 他の地域にいた日本人の妻子を全部、日本に帰しちゃった
 しかし帰さない会社もあった、南太平洋貿易なんか帰さな
 かった。そういう会社は、女、子供が残っているわけですよ。
 スラバヤに向かう船底では、そういう子供たちが、「オジ
 さん、水ちょうだいなんて、水を欲しがってね、悲惨なん
 のでしたね。」
 スラバヤからは汽車でインド洋側の漁港、チラチャップ
 に連れて行かれました。汽車はせいたくなもの、チーク

の薪を焚いて走りましたね。チラチャップにはジャワ島、
 スマトラ島、シンガポール、マレーシアなどから約二千人
 ぐらいの日本人が集められていた。そして、そこから全員
 が船に乗せられた。

さあ、今度はどこに連れて行かれるか、てんで見当がつかない。それで、こりやあフリカ行きだろうなと思つていたら、オーストラリアのアデレード港に入港した。そこからまた汽車に積み込まれて、オーストラリアのすつと内陸部のラフティの収容所に送り込まれたんです……。

※

その後はですね、昭和十八年に捕虜交換が成立しましてね、私は運良く収容所を出られて、またブトン島に帰ることになったんですがね、ブトンの真珠養殖はそれで終了でした。真珠養殖とこの話ではない、なんせ、戦争ですからね……。

まあ、向こうの戦前の真珠貝採集や養殖のことを知つてるのは、私の年代の人で最後でしょうね。何年か前、朝日新聞に、私と同じ年代の人で、本島島で「ダイバー」をやつていた人が、今も本島島かどこかに住んで、仲間のダイバーの墓を営っている、という話が載っていました。まだその人は無事なのか……。いづれにしても、昔のことを知っている者は、もう少なくなつてます。

なんのかんの言つても、ブトンはいい島だったのですねえ。ぜいたくさき言わなければ、山に行けば食べ物は何でもあつたし、あくせく働くこともないしね、のんびりね、ブトンは幸せですよ。私も慣れてましたね、あんな暮らしにもう一度、ブトン島に行つてみたいですね。

※ブトンの真珠養殖の終り

昭和十六年十二月、開戦によつて中林さんたち八名の養殖場職員はオーストラリアのラフティ収容所に捕留された。養殖場は放置されたままであつたが、日本軍がイ

ンドネシアを占領して後の昭和十八年に日艦隊が南緯線、布オ直次の二人によつて、発見されたままの白蟻貝を引き取り、多岐を採取した。それはオーストラリアの真珠本庄に送られ検査されたが、スラバヤに留留していた日本陸軍の要望によつて、軍に引渡されたがその後の行く先は不明のままである。

ブトンの真珠生産は、昭和十六年から十八年までの十二年間に、約四十億が生産された。

※戦後のブトン島の真珠養殖

戦後、ブトン島で真珠養殖を試みたのは、中林さんご夫妻さんがある。中林さんご夫妻は東京水産大を出た人で、ブトン島でオーストラリアのダイバーと違って養殖を試みたが失敗した。ブトン島の真珠養殖も一九五〇年ごろのタービター騒ぎのなかでうまくいかなかったようである。

中林 茂さんのブトン島でのダイバーの体験談は、東南アジアの庶民の歴史や文化に興味と深い共感をいだかれ、「バナナと日本人」「マンガロープの沼地で」など、多数の著作を著しておられる鶴見良行さんを中心に、インドネシアの農業経済等の勉強している福家洋介、同じくインドネシアにはのかな憧れをいだいている観文研の森本孝の三人が、世田谷区奥沢の中林さんのお宅を訪ね、前後四回に渡ってお聞きした話を、まとめたものである。

私たちと中林さんの出会いは全く偶然であった。今から三年前、鶴見良行さんが世田谷市民大学で、インドネシアのアンボン島やブトン島の木造船船などについての講演をされたが、その聴衆の中に、中林さんがいらしたのである。講演の後、中林さんは鶴見さんに、「私はそのブトン島で昭和五年から白蝶貝を採るダイバーをやっていた」と話しかけ、鶴見さんをびっくりさせた。よもや聴衆の中に、インドネシアの辺鄙な島嶼のひとつであるブトン島に十数年間も暮らしたところのある人が混じっているとは、鶴見さんも想ってもみなかったのである。

その翌年、中林さんとの出会いが刺激となって、鶴見さんと福家は、中林さんの暮らしていたというブトン島に渡ってみた。しかし、そこにはもはや、中林さんが白蝶貝を採り、真珠を養殖していたという形跡は何ひとつ見当らなかった。

帰国後、私たち三人は再び中林さんにお会いした。日本人でブトン島の真珠養殖やダイバーの暮らしを知る人は少ない。放っておくと、歴史の中

で埋もれてしまう。日本人とブトン島とのつながりを、どんな形であれ残しておかねばならない、と思えたからである。お会いしてその旨を伝えると中林さんは、憶えている限りは何でもお話しいたしましょう、と快く体験談を語ってくれることを承諾して下さった。

そこで三人は、一回で約一時間半ずつ、四回に分けてブトン島での日々についてお話を伺い、それをまとめたものが、本号の特集である。中林さんのお話の内容は出身から太平洋戦争でオース



茂さん(昭和61年4月)

トラリアに抑留された時など幅広いものであったが、その中心はダイバーとしての体験であった。すでに喜寿を過ぎておられる中林さんだが、その記憶はすばらしく、私たちはしばしば驚かされたものである。

中林さんの語りはまだ終わっていない。この先、いつまで続くかわからない。そこで、あるまとまりのある部分だけでも活字化しておこうと考えて、今回はダイバー体験の部分だけをまとめさせてい

ただいた。

さて、その後の中林さんの話であるが、オーストラリアに抑留されていたが、昭和十八年に日本軍と連合軍との間に捕虜交換協定が成立し、アフリカのロレンソ・マルケス港で釈放されたからは、再びブトン島に戻っている。また、昭和十九年に一時日本への帰国を果たすが、次にはボルネオ島のパンジャルマシんに渡り、そのまま終戦を迎えている。いずれも中林さんの意志以外の別の力が働き、そうせざるを得なかったようである。中林さんが帰国を果たしたのは昭和二十一年になってからである。帰国後は三菱社員としての生活に戻り定年まで勤められている。

私たちにこのようなお話しを聞かせて下さった中林さんは今年で七十九歳になられる。しかし、さすが、アラフラ海では何百名もの犠牲者を出した、過酷なダイバー稼業を耐え抜いてこられた人だけに、体は頑健で、今でもかくしゃくとしていられる。地元の老人クラブの先頭に立って、さまざまな社会奉仕活動に参加してもおられる。

私たちも中林さんがいつまでも元気であられることを望むと共に、今後もその深い人生の話をお聞きしたく思っている。

尚、本号の中林さんのお話は、福家洋介と森本孝が共同で整理し、文章化したものである。そして最後になるが、録音テープ起しの労を取って下さった西沢忠晴・北原千鶴子・石坂泉・粕谷三奈子さん、中林さんの古い写真アルバムを複写撮影して下さった近山雅人さんたちに、お礼申し上げます。

(福家洋介・森本孝記す)

慰霊祭のご案内

呉の大之木さんから下記のとおり慰霊祭のご案内がありました。

8月16日(日) 10:00よりマネンボネンボの元山記念霊園にて、海上自衛隊練習艦隊との合同慰霊祭になります。会員の皆様のご参列をおねがいたします。

拝啓 ご無沙汰して居ります。

その後お変わりございませんか。

平素何かとお世話に相成り厚く御礼申し上げます。

扱、今年、ご存知と思いますが、8月マナドに於いて国際観艦式が挙行されることに関し、日本から海上自衛隊の練習艦隊が参加することになりました。

その折、大変ありがたい事ですが練習艦隊として、マネンボネンボの慰霊碑前で慰霊祭を行われることになりましたので、既に私たち元山戦闘機隊としてはすべての公式行事を終了して居りましたが、日本国の練習艦隊がマネンボネンボにお詣り戴くということになると、当方としても当然と一緒に慰霊祭を行うことにした次第です。幸い当方一行9名集って戴きましたので、下記日程でマナドへ参ります。

御多忙とは存じますが、慰霊祭の当日8月16日、会長はじめ役員その他の方々に是非御参列戴きますよう心より御願ひ申し上げます。

尚、慰霊祭終了後、ピトン日本人墓地に参拝の上、ピトン日本人会に表敬訪問を考えて居りますので、宜敷御諒承下さいますよう。

敬具

記

1. スケジュール

2009年8月15日	12:50	マナド着 マナド市内「クオリティーホテル」泊
8月16日	10:00	マネンボネンボ合同慰霊祭
	11:20~11:30	ピトン日本人墓地参拝 日本人会へご挨拶
	午後	ランゴアン、トンダノ等慰霊訪問
8月17日		マナド、テーリンの丘で慰霊祭
	午後	練習艦隊訪問
8月18日	13:30	マナド発
	18:00	デンパサール着

入会挨拶と開業のお知らせ

日本人会の皆様はじめまして、小寺 典 (みのる) です。私たち家族3名、かねてからの計画どおり、三重県亀山からメナドに引っ越してきました。引っ越した当初はいろいろあっておそくなりましたが、ようやく旅行代理店の開業もなりましたので、遅ればせながらご挨拶申し上げます。店(自宅)は別添略図のとおりです。いつでもお気軽にお寄りください。今後ともよろしく願いいたします。

小寺 典

SAKURA Tour & Travel

PT. SAKURA MINDORU

Jl. Sulawesi No.36 Bahu Lingk. VII Manado
Telp/Fax (0431) 827274, HP 081340874436

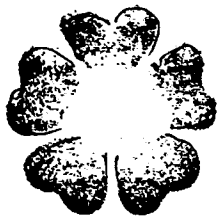
0431-3646802

MELAYANI :

- Paket Tour Domestik & Internasional
- Tiket Pesawat Domestik & Internasional
- Voucher Hotel Domestik & internasional
- Pembuatan Pasport & Visa
- Transportasi Dari & ke Airport
- Tiket kapal cepat Express Bahari
Mdo-Tagulandang, Mdo-Siau, Mdo-Iahuna
- Tiket Kapal Laut PELNI



Reservasi Online
Tiket diantar ke tempat Anda

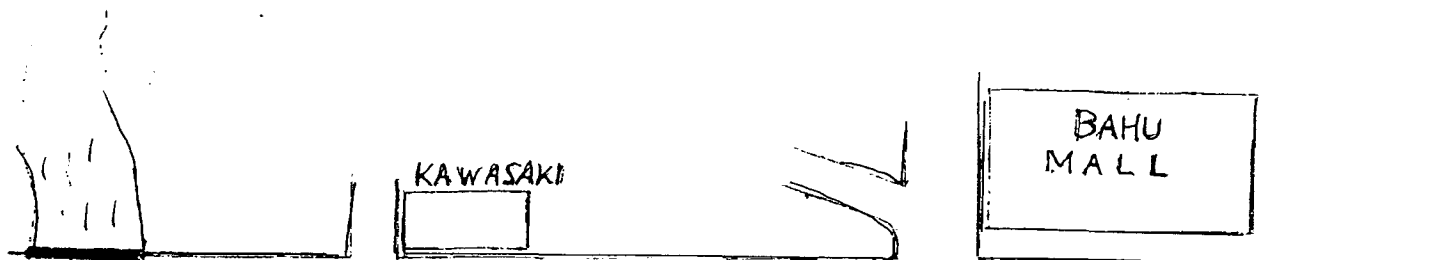


SAKURA Tour & Travel

PT. SAKURA MINORU

Jl. Sulawesi No.36 Bahu Lingk. VII Manado Telp/Fax (0431) 827274; 3640802 HP 081340874436

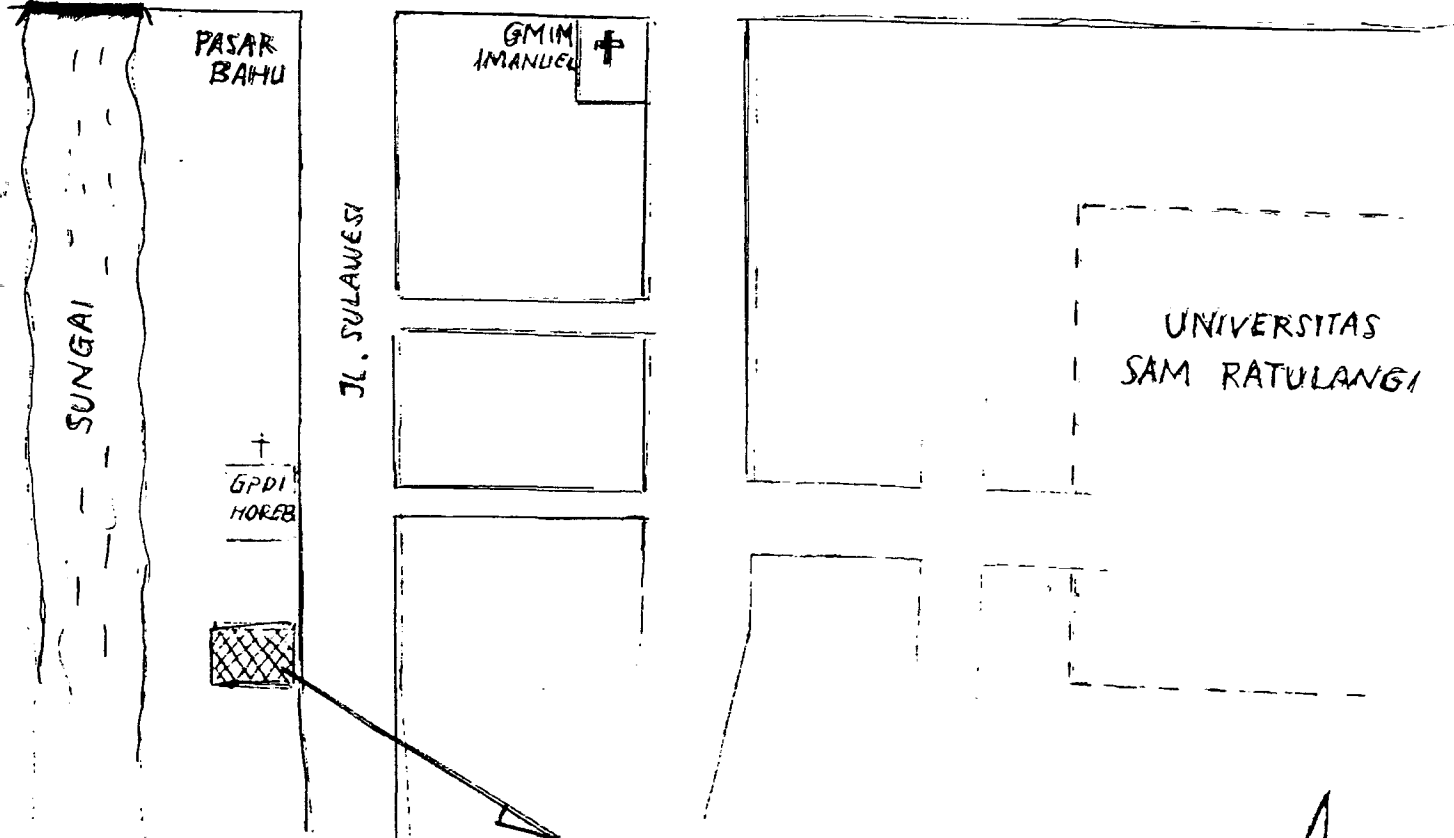
Tel. Fax : (0431) 827274;
H.P. 081340874436



JL. W. MONGINSIDI

- KE PUSAT KOTA ->

← KE MALALAYANO

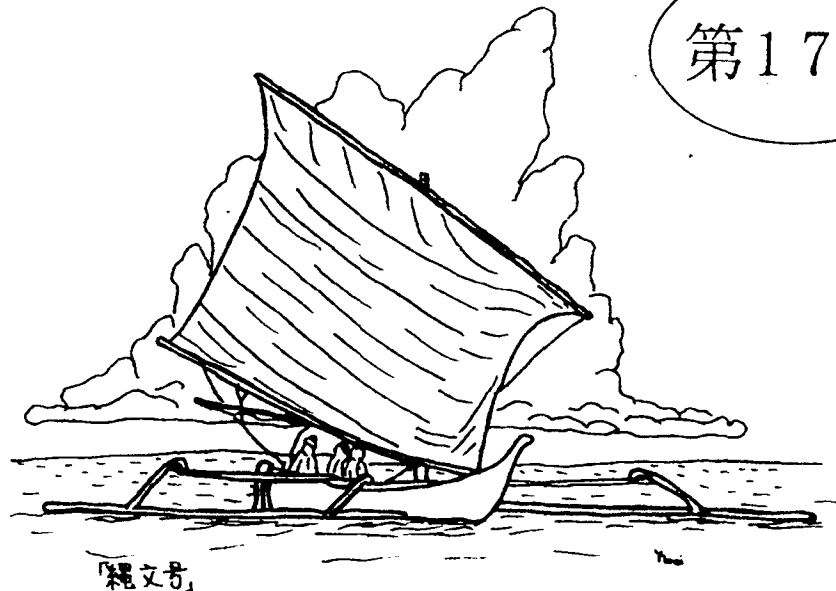


SAKURA
Tour & Travel
PT. SAKURA MINORU
Jl. Sulawesi No.36 Bahu Lingk. VII Manado
Telp/Fax (0431) 827274, HP 081340874436
0431-3640802



タルシウス

第17号



表紙についてのコメントです。

今年の4月に「縄文号」と「バークル号」2隻のアウトリガーの丸木帆船が、スラウェシ島を出発し、一路、沖縄の那覇市に向かっています。

「新グレートジャーニー」と銘を打ち、日本人のルーツを探るとい活動をしている関本吉晴さん（武蔵野美術大学教授・文化人類学）が、その一環として、海上ルートを検証するための航海だそうです。

関野氏のホームページによると、「スラウェシ島ラムベを出発」となっています。レンベのことでしょうか？ もしそうなら、さらに親近感が沸いてきます。今後、調査してみます。

那覇到着の一報を待って、レポートしたいと思っています。

今回は航海の無事を祈りつつ、その「縄文号」を表紙にしてみました。

では、またよろしくお願いいたします。

羽根井

編集後記

7月初旬発行の予定が編集の不幸で8月にずれこみました。今号ははからずも真珠養殖の特集みたいになりました。「白蝶貝の海に潜る」は昭和61年(1981)10月発行の旅行雑誌「あるくみるきく」(日本観光文化研究所発行)から抜粋しました。元潜水夫・中林さんの語りは、戦前のインドネシア進出企業の様子をつたえるものとして非常に価値のあるものといえます。このような貴重な記憶を拾い上げた鶴見良行教授にあらためて敬意を表します。20年以上も前に発行された小冊子「あるくみるきく」は、前号の「インドネシア独立秘話」と同じく大岩さん宅で見つけました。

真珠養殖事業が成り立つための条件はいろいろ挙げられると思いますが、基本になるのは、環境汚染のない穏やかな養殖海面がある、ということでしょう。気候的に比較的穏やかで開発も進んでいないインドネシアの沿岸海域は、真珠養殖の適地としてオランダ植民地時代から日本の業者に注目され、利用されてきました。本会の会員にも榎本さんはじめ真珠養殖事業にたずさわる方が何名かおられます。真珠養殖というのは生きた貝を相手の、繊細な神経を要する仕事ですから、どちらかという日本人に適した仕事ともいえます。失礼ながら何事にも大らかなインドネシア人には不向きな仕事でしょう。かくして養殖場はインドネシア、技術は日本、という構図になっていますが、先に記したとおり「汚染されていない沿岸海域」というのが大前提にあります。養殖場の環境チェックは関係者の重要な役目のひとつであると思います。真珠養殖にかかわっている方々は「環境の監視人」でもあります。インドネシアも経済の発展にともなって、地域によっては開発の波が打ち寄せているようです。インドネシアの経済発展は望むところですが、少なくとも真珠養殖事業が成り立つような自然環境は維持したいところです。

茨城の坂本さんからミナハサ自転車旅行の原稿をいただきました。ご本人はまだ若いつもりでいるかも知れませんが、あのコースを1日で走ろうというのはいい度胸ですね。坂本さんが行き倒れになりかけた山越えの道は、私も車でとおったことがあります。大木がうっそうと繁って、昼なお暗いジャングルの道という感じで、鹿か大蛇でも出るんじゃないかと気にしがら通ったのですが、あの道を日没間際に自転車で越えようというのはすごいことです。タクシーの運転手は自転車があるから人間だと分かったと思いますが、驚いたでしょうね。次回は年齢相応にトンダノ湖一周のサイクリングをおすすめします。湖畔の道は平坦、稲穂がゆれる田園風景はサイクリングにもってこいだと思います。カカスの飛行場跡に近づいたら小休止して、「空の神兵」を歌いましょう。

表紙はいつものとおり羽根井さんです。コメントにもあるとおり、スラウェシから沖縄向け縄文人のをせたカヌーが航海しているようです。これについては次号で羽根井さんのレポートがあります。乞うご期待!

(長崎)

会員名簿

会報「タルシウス」電子版では不特定多数の方が閲覧するため、セキュリティ上の観点より会員名簿は非公開とすることとしました。

(2014年04月20日)

上記理由により会員名簿が非公開になりましたことをご了承ください。

- 会報タルシウス（製本版）には従来通り名簿は掲載されます。
- 各会員に対しましての個別の、または、尋ね人などのお問い合わせは、

直接日本人会へお問い合わせください。

該当会員に連絡後、会員より直接連絡するか該当会員の同意のもとで、

連絡先をお知らせすることといたします。